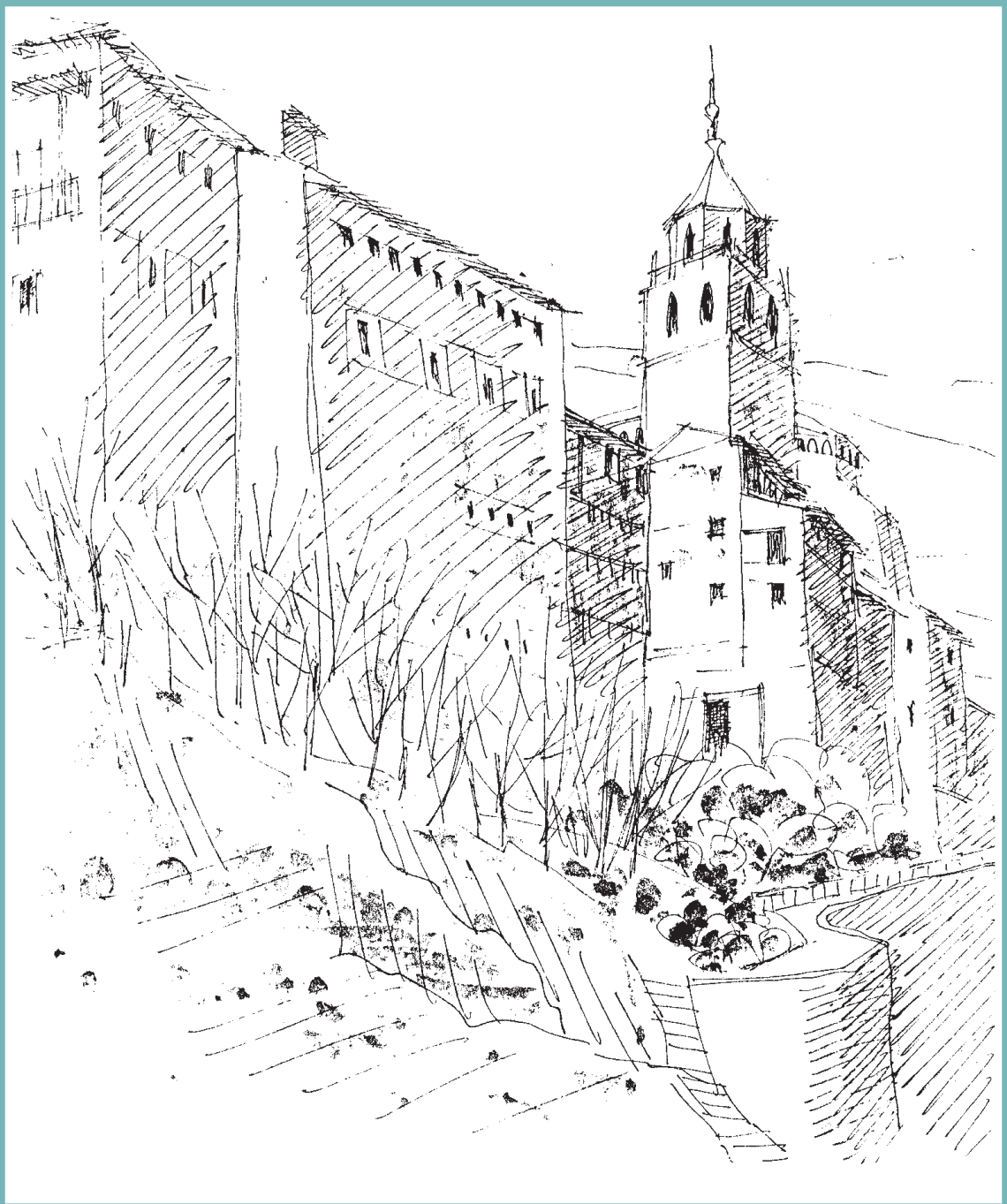
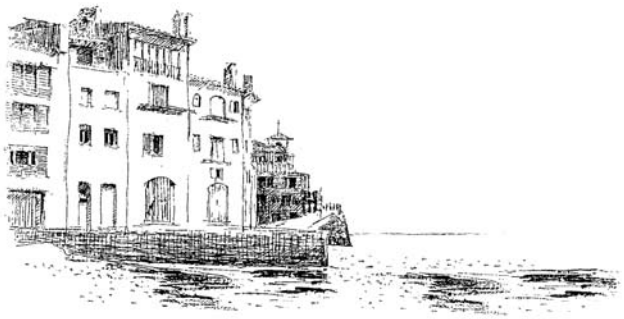
やまさき文化

'06－3＊No.25



宍粟市山崎文化協会



「宍粟」の市名について

宍粟市山崎文化協会会長　藤井慧乗

私の育った須賀沢は宍粟の東の出入口である。日清・日露戦役の時は、願寿寺の寺庭に戦場に召集された兵士達が最後の挨拶をして宍粟に別れをした。又無事帰還すると峠から見る宍粟に喜びの涙をしたそうである。この村を通る道は、古来山陰山陽を結ぶ重要街道であった。

この道は村の西の渡し場より峠まで船問屋、酒屋、牛宿の前を通り安志に至る一本道である。この村の道を何十頭もの牛を数人の牛追いのおじさんが尻をたたきながら追って行った。又この道は荷馬車輸送の重要道路であった。然しこの道は、峠までに四ヶ所の急坂と四ヶ所の平坦路があった。この急坂にかかると御者のおじさんは、荷物満載の車を前進させるために太い青竹で大声で牛馬の尻をたたいた。牛はハアーハアーと涎を流しながら登って行った。私たち子供は「かわいそうになあ」と牛に同情して車を押してやることもあった。然しこの道は牛馬にとって残酷な道ばかりではなく、牛馬を労る心やさしい道であった。即ち急な所では力いっぱい頑張る、平坦な所では休みながら進む。坂道をいく慈しみの道であった。宍粟の村人は昔から、山で働いても、松茸をとるのでも、山の動物とのつきあい、川の魚のとり方においても何かあたたかい慈しみを原点にした心があった様である。

そこで題の宍粟という市名である。宍とは猪かと思っていたら播磨風土記によると、伊和の大神がこの地に来られたとき、巨鹿に出遇れた。猪でなく鹿であった。この地方は山深く猿鹿猪など動物が多いので肉多とも書いてある。さて私の推論であるが、肉多の里は、自然が温暖、山も野も豊かであるから動物も多い。米麦も豊かに実り、美酒が出来、雨が適当に降り、乾燥と寒さは、日本一のそうめんの産地でありうる。ここに宍粟という市名のイメージは自然と人間とけもの達の美しいハーモニーを感ずる事である。

宍粟文化、山崎文化とはギンギラギンのものであってはならない。

二十一世紀に向かって船出する宍粟市は以上の意味で日本一の市名と、嬉しくなるネーミングである。

◇目　次◇

お殿様もはまった「石門心学」　町　悦子　1
『立待居待』　浅田　耕三　6
「教育」再考　尾崎　久記　12
短　歌　栗山　節子　14
俳　句　芦田　八重　16
山崎町の史跡巡りⅡ　春名　俊夫　18
山崎植物同好会の活動について　久宗　丑雄　18
念願の県大会優勝！　吉岡　章雄　19
茶道と私　小原千鶴子　19
能楽とは　伊野　操治　20
青木の獅子舞　加藤　寿一　20
数学の魔術とエムエイ　赤松　茂毅　21
合唱団に入団して　梅岡　千翔　21
私と民踊　山下　リサ　21
高齢期だと自信なくさず　白谷由美子　22
「枯葉」によせて　田谷　明治　22
楽しかった一年半　藤井　七代　23
地域を代表する花　辻川　輝匡　23
平成会十七年のあゆみ　田口　實　24
日本民謡に出会って　田内　義隆　24
会員の句を二句ずつ　佐野　祐介　25
鳴呼　紅の血は燃えて　清水　省三　25
今日このごろ　岸本　哲郎　26
千田淳平氏の功績を想う　福岡　久藏　26
六十の手習いで思うこと　松岡　潔　27
事務局だより　寺元美智子　27
編集後記　前野　良造　28
表紙画／カット／　浅田　耕三　28
表紙題字　福岡　久藏
荒木　俊介

お殿様もはまった『石門心学』

山崎文学会　町　悦子

播州山崎藩本多家五代目の藩主本多忠可侯は、天明元年（一七八一）四月、江戸在勤中にお側付の医師山野辺三のすすめによって、石門心学の講師中沢道二を江戸藩邸に招き、令室や家臣と共に聴講され、続いて九日間も連続して講話を聴かれ、大いに悟るところがあったといわれています。その後も忠可は熱心に心学の修行に励まれ、国元にも心学を広めようとなさいました。

天明五年には山崎に西村昌園という心学者がいて、その屋敷の場所が「天保山崎藩の図」の大手前通りと桜之町が交差する南東の角から数えて四軒目（現在の防災会館のあたり）に書き込まれています。

また全国に累計約二百あったといわれている鬻舎（心学の講義を行う場所）の百二十一番目のものが「温古舎」という名で山崎町本町にあった記録があります。

江戸時代の年貢率は寛文（一六六一）の頃までは七公三民で、農民の生産物の七割を領主が取り立て、農民の手許には余剰生産物は殆ど残りませんでした。

大名の実収入は公称禄高の七割で、禄高十万石の大名では米換算で七万石の収入があったことになりますが、この収入で江戸と国元の生活や参勤交代、何年かに一度は命ぜられる天下普請にかゝる費用のすべてをまかなわねばなりませんでした。

それに加えて米収入を貨幣に換金しなければならない武家は原則として米の増産でしか収入増加を図る道がなかったのですが、米は増産されるほど米価は下がり、米に対して諸物価は高くなるという「米価安の諸式高」の構造に陥り、江戸藩邸の都会生活と国元との二重生活を強制されていた大名や武家は財政の窮乏化が進むことになりました。

忠可は藩の財政を建て直そうとそれまでの家格主義を排し、能力主義、人材主義を採用して、それまでは藩では中位の家柄であった佐藤織之助善五衛門景長を見こんで、近習役から奉行、家老にまで取立てられました。織之助は忠可が二一才で藩主になられたとき二五才の江戸詰の青年武士で、以後明和、安永年間の改革に藩主を援け、忠可と共に領内を視てまわり、年貢の軽減や借金の返済の延期や一部の商人の特権を廃して百姓に生産物を自由に売ることを認め、また藩士には最低の生活必需品は藩がまとめて購入、配給し、家屋修理は作事係が無料で行うなど、藩政の改善、合理化に努めました。

この時期は天明初年に始まった大凶作いわゆる天明の飢饉で、全国的に人口が激減しており林田藩や赤穂藩でも強訴や打ちこわしが起ったのですが、山崎藩では宝暦十年（一七六〇）から天明八年（一七八八）にかけて人口が一八三人増加していて、このように飢饉の被害が少なくてすんだのは、忠可と佐藤善五衛門の努力があったからだと山崎町史に書かれています。

日本の社会が貨幣経済へ移行してゆく中で、幕藩体制の経済基盤であった米本位制を強化させようとしたのが享保、寛政、天保の三大改革でしたが、上米令（大名が家臣の俸禄の何割かを天引するのを家臣側から自発的に藩に収める形にする）棄捐令（旗本や御家人の古い借金を帳消しにし、それ以後のものも利子を引下げる）、人返令（年貢収納量を増やすため、都市へ流出した人々を帰農させ、また出稼ぎを制限する）や倹約令（こまかく贅沢禁止を定めている）のような法令が出され、改革といっても体制の延命策にすぎませんでした。半知借米令（家臣の俸禄の半分を借り上げる）のような法令を実施してもまだ財政の苦しい大名は、大坂や江戸の大商人から借金をしましたが、この〝大名貸し〟は返済不能が多く、このために商人は破産し、多くの商業資本が消失してしまいました。

山崎闇斎は『盍徹問答』の中で大名に債務の支払い停止を勧め「それまで相当額の利息を支払ったのだから、それを元金償還に充てれば債権者は困らない」といっていますし、熊沢蕃山は『大学惑問』で「債権者を害さずに借金を無くすには、無利息にして、元金は債権者の孫や曾孫の代までの期間に返済すればよい」と大名の借金踏み倒しを財政改革の有力な手段であるかのように述べて

います。荻生徂来に至っては「商人が潰れるのは気にとめなくてもよい」とまで言っています。学者のくせに変化してゆく社会に対する認識がまるでないのです。

きびしい身分制度があり、その上に体制の強化のための政策や法令が出されて人々の生活に対する規制はますます強められてゆき、そのような中で生きてゆくことは、今とは比べものにならないほど難しかったことでしょう。

人々は世の中の先行きについての不安や、その社会の中で生きてゆくための規範を求める気持ちが強かったでしょう。こうした社会的背景に石門心学が発生し普及する素地があったと思われます。

貞享二年（一六八五）丹波国桑田郡東懸（とうげ）村（現在の京都府亀岡市東別院町東掛）の中農の次男に生まれた石田勘平は、その当時は十石以上の収入がない農家は分家することが許されなかったので、十一才のとき京都の商家へ丁稚奉公に入りました。

数年後はじめて藪入りで家に帰ってきたとき、主家から盆暮に給せられる筈の仕着せではなく家を出たときのまゝの着物であったので、就職の世話をした人が調べてみると、その店は経営不振になり、傭人に仕着せすら与えることもできないことが判ったので、父親は勘平を家へ呼び戻しました。その時も垢のついた古着のままであったので母親は大そう不愍がり、そんなところになぜ今迄黙って我慢をしていたのかと訪ねますと

我京都へ登んとせし初、家を出るとき草鞋（わらんじ）をはくを父母見給ひて諸ともに仰せ聞さるゝは、汝我屋にて養難き故、今より奉公に出すなり。その後京都にて主人をとり立身すべし。主人は養ひ給はるのみならず、終には身を立て給はる人なれば、親なり、主なりと思ひ、随分大切に奉公致すべきよし畏うけ給はりぬ。夫故今迄其言（こと）を守りぬれば、親と思ふ人の事何程の不足あればとて申さるべきや

と答えたということです。（『石田先生事蹟』）

この人が後に石門心学を興し、その教学は日本全国に広まり、多くの門弟に尊崇された石田梅岩という人です。

梅岩は六十才で亡くなりましたが（一七四四）その没後百七十年も後の大正七年（一九一八）に正五位を追贈されています。

門人達は師の遺志をついでその教えを弘めるために梅岩の伝記『石田先生事蹟』の完成、著作『都鄙（とひ）問答』（田舎から出てきた故郷の人が京都に住む梅岩をたずねて問答を重ねる意）、『斉（せい）家論』（家、この場合とくに町屋をととのえ治める意）の重版、鬻舎（こうしゃ）の開設などに努力しました。直弟子の一人手島都庵（とあん）は教化運動の組織化、統制に功績があり、その弟子の中沢道二は講釈で人を惹きつける才能がありました。その成果は多大なもので、地域では四十二ヵ国、社会階層では六十四大名に進講し、旗本六十五名に修行手引きをしました。本多忠可もこの中の一人であったのでしょう。

何の後楯もない一介の町民のはじめた教えが武家階級、それも多数の大名にも受け入れられたことは、当時としては驚異的なことでした。

心学の研究者石川　謙（一八九一～一九六九）は、「武家階級に於ける心学の浸潤はその様式に於いても、その精神に於いても、庶民への場合とは自ら趣を異にしている。上流武家の社会では血統と家柄を重んじたから、心学教化も亦「家庭」を苗床とし、血筋に寄添うて伝播したもので、家族制度と教化普及の様式とが如何にもがっちりと結びついている。家庭を道場とした武家心学にあっては、当然精神修養の学であった。従ってその修行方法は道話と同時に修行咄を持出して、続いて策問を与え、修行工夫に入らしめるのが常である。中・下層の武家に滲透していく情況についてはその過程で、心学教化を積極的に採りあげた藩、無関心であった藩、抑圧にまわった藩、また方針に転換がみられる藩などに分類し、これらをさらに時代別・地域別に細かく検討すると、その結果幕藩権力の士庶教化と心学教化運動とのかかわりが明らかになってくる。心学教化が武士教化策に及ぼした影響については、各藩の藩黌（はんこう）（校）がそれぞれいかなる学派・学統によって運営されていたのか、どのような組織のもとに教育課程を用意しつつ成長をとげていったのかを精査して、ここをもっておのおのの藩権力が藩士教化に心学を具にしたのか、具にしなかったか、あるいは具にするのを積極的に排除したのかを判定し、総体的には、心学教化が武士階級に働きかけて高い地位を占めていた時代があった」と結論しています。

石田勘平は八年の間故郷で農業や山仕事を手伝っていましたが、次男の身ではどんなに働いてもただ食べさせてもらうだけで、将来への希望は全くありま

せん。そのせいでしょうか、二三才のとき再び京都の商家へ奉公にゆきました。そこでは毎日〳〵の商家の仕事をよく勤めながら読書に励んだと伝えられています。

かく志し給う故、下京へ商ひに出給ふにも、書物を懐中し、少しのいとまをも心がけ学び給へり。朝は傍輩の起きざるうちに、二階の窓に向ひ書を見給ひ、夜は人寝静まりて後、書を見給ひて、主人の用事、少しも闕き給ふことなし。（『石田先生事蹟』）

しかしこんな事がありました。

あまりにも生真面目であったせいか、勘平は「気を煩ふ」つまりうつ病になりました。主家の隠居は「人は木石ならぬ身のこと、日夜薬をのみ、勤めを欠くくらいならば、むしろ遊興するがよかろう」と奨められました。少々お金を使っても無事息災になって商売に精を出してくれた方がよいというわけです。〝主家公認の遊興〟という珍らしいことになりました。

ところがさすがの勘平も、つい〳〵遊びすぎて金を使いすぎてしまい、「病気がよくなるまで遊ぶのは道理があるが、一たん快気して後もなお遊興をつづけるのは「盗」と同じである」と気がつき、自分の衣類や脇差まで売払って主家に弁済し、やっと自分の「穢シキ曇リヲ晴シタ」と思い、また仕事に励むことができるようになりました。

後にその店の使用人の頭分になったときでも、冬の夜は一番暖い場所は人に譲り、自らは店の端近くに寝て、夏の夜は、小僧たちが夜具をはねているのを度々起きて着せてまわったということです。

しかし勘平は何故それ程までに書を読み、学問に近づくことに執着したのでしょうか。それは自分の辛い体験――初めの奉公のみじめさ、家へ帰ってはげしい労働をつづけても自分ではどうすることもできない法のきびしさがもたらした絶望感、親の教えと町家の手代として処してゆくために必要な心の持ち方とのあまりに大きなちがい――などに悩む彼にとっては、本を読み学問に頼るしか方法がなかったのでしょう。自分も他の者もみんな辛い目に遭っている、何故こんな苦しい思いをしなければならないのか、それでも生きなければならない人間とはどんな存在なのか、と考えたのでしょう。

石門心学の教義の中心は、〝すべての人間の本性そのものを「心」として捉え、更にその中核に神儒仏三道に一線を画し且つそれと矛盾せぬ独自の内実「性」を備える〟とされています。

ここにおける「心」と「性」の語は、内容が抽象的で仲々難しいのですが、

心トイヘバ性情ヲ兼ネ、動静体用アリ、性トイヘバ体ニテ静ナリ、心は動イテ用ナリ。心の体ヲ以テイハヾ性ニ似タル所アリ、心ノ体ハウツルマデニテ無心ナリ、性モマタ無心ナリ。心は気に属シ、性ハ理ニ属ス。（『石田先生語録十二』）

性ト云ハ是レ我ニ在ルノ理、只コノ道理ヲ天ヨリ受ケ我ニ有所トナス。故ニコレヲ性ト云。（『語録』二三）

このように難解ですが、

汝万物ニ対セズシテ、何ニヨッテ心ヲ生ズベキヤ。是万物ハ心ナル所ナリ。寒来レバ身屈シ、暑来レバ身伸ブ。寒暑ハ直ニ心ナリ。（『都鄙問答』三）

元来形アル者ハ形ヲ直ニ心トモ可知。……孑孑水中ニ有テハ人ヲ不螫、蚊ト変ジテ忽ニ人ヲ螫ス。コレ形ニ由ルノ心ナリ……。蛙ノ形ニ生レバ蛇ヲ恐ルヽハ、形ガ直ニ心ナル所ナリ。（同上）

ここまで読めば、少し判り易くなったかと思われます。

「尽心知性」とは心を尽くして性を知ることですが、そのために寝食を忘れるほど、ものを見ては「見るものは何か」、音を聞いては「聞くものは何か」、「何か何かと問うものは何か」と、ありふれた一切のものを一切ならしめているのは何かと油断なく追究して考えに考えぬき、その上にそれをなした自分の認識主観の「目」をとり去って「見るもの」と「見られるもの」との二元的対立がなくなり、天（自然）と人とが一つになる「天人合一」の境地に達することで、これを「本心発明」といっています。

梅岩の主著といわれる書物に『都鄙問答』（四巻）というのがありますが、その四六％は「心」と「性」について書かれています。

『都鄙問答』は「田舎から出てきた故郷の人が京都の梅岩のところへ来て、心おきなく問答をする」の意味の通り問答形式で書かれており、テーマは色々で、例えば「播州ノ人学問ノ事ヲ問フノ段」というのは、「播磨の国姫路の在

方でも、後つぎ息子に学問をさせると村へ帰ってくるのを嫌がったり、農業をおろそかにして、農村の伝統や風習を見下したりするので、これでは村や家が困るのだが……」という問いかけで始まっているのがあります。

文中には多くの書物からの引用があって、「性理問答の段」だけでも、儒教関係の書十二冊より六七回、その他の漢籍六冊より六回、仏書六冊より七回、国史、図書関係二冊より六回と計九十回、この他にも老子、荘子の説からも度々引用されているのです。しかしこれらはたゞ〝引用する〟だけで、その書について講義をするのではありません。

仏老荘ノ教ヘモ、イハバ心ヲ磨ク磨種ナレバ、舎ツベキニモアラズ。一度琢キテ後ハ、仏老荘ヨリ百家衆技ノ類ヲ聚メテ見テモ、心ハ鏡ノ如シ。物来ルトキハ即チ応ジ、物サルトキハ即チ霊々トシテ一物ヲ止メズ。コノ心ヲ得テ後ニ、聖人ノ教ヘニ向ハバ、明鏡ニ対シテ我ガ形ヲ見ル如シ。天地万物ノ上ヲ見ルモ、惟一理ニシテ我ガ掌ヲ見ルニ同ジ。皆我一体ナリ。

（『都鄙問答』性理問答ノ段）

一つの学をとって他の学を捨てるではなく、ありとあらゆる学問を心の磨種としてとり入れ、「天地合一」の境地を目指すことを目的としているのです。

石田勘平は石田梅岩と号して、四五才のとき（一七二九）自宅を講席にして公開講釈を始めました。そのとき表の柱に書付けを出し、何月何日開講　席銭入不レ申候（聴講料はいりません）無縁にても（紹介者のない、通りがかりの人でも）御望みの方々は、無二遠慮一御通御聞可レ被レ成候（遠慮なく中へ入ってお聞き下さい）と書いて広く一般の民衆に呼びかけました。

この書付けはその後どこで講義をするときにも表に掲げられたそうです。これを見て殊勝だという人もいましたが、笑う者もあり、無学のくせにと譏る人もあり、その開講の日には聴手は一人もなく、二日目もまた独講釈、三日目は格子の外からのぞき見をしていた農夫を中へ連れて入り、その農夫一人に講義をしたと伝えられています。しかし次第に人が耳を傾けるようになり、時には〝男女老少の聴衆群をなす〟ほどになり、京都にも大坂にも五十日も続く出講釈をするようになったのは講釈をはじめたときから六、七年も後のことでした。

梅岩が学問の道へ入ったもとはと言えば〝生きる苦しみを何とかしたい〟ためでした。ですから「本心発明」を得、「天地合一」の境地に至ることができたならば、それを以て〝実践〟へと向かわねばならないと考えました。よりよい生き方を具現することが「実ノ学問」であるとしたのです。

「月次の会」という門弟達のための練成会では「兄弟間の財産争い」「養子の養父と実父とに対する義理」「総領と庶子間の家督ならびに遺産相続問題」「嫁と姑との争い」などについて「かねて問を出し、門人に答書をさせ、先生も答を書き、判断したまへり」（『事蹟』）のようにして事上磨練を行いました。

この会での梅岩の答えを集めた『石田先生語録』には「或人問曰、倹約は如何」「或問曰、世俗ニ云ハ親ハ苦労スル」「或問、家内ノ者ヲ如何致シ義ニ向」「此ニ妻ニ置去リニナリシ者」など実際的な題目が多く見られます。

梅岩のこの思想と行実が後世の心学者に受けつがれました。一八五〇年中国筋一帯が風害、水害を蒙り、飢民が天領である大坂、京都へ「お救い」を求めてゆくが大坂では「お救い」はなく、千人もの餓死者を二百人と幕府へ報告したりしていましたが、

京都は去冬霜月より御救恤これあり候。この起こりは例の道話社中（心学社中）より打立ち、今以てこの社中主としてとり計らひ、余程その仕法も宜しく、厳重に行なはれ申し候。……公正に取計り、施行仕り候段、犬低京師中には餓死これなき由。（熊本藩の命を受けて諸藩の実情視察を行った者の手紙より）

心学者側の記録には、九月に施行の計画を立て、教諭所と鬻舎九舎とが区域を分担して施行人数と米高を割当て、とりあえず一日に一万五十人ずつ十九日分の施行米二百五十九石を用意して、

十一月二日（嘉永三年）より施粥開始……（嘉永四年）十月十九日まで、凡そ一ヶ年の間、教諭所始め十ヶ所にて、都合人数一万六千人前後に少々づつ増加はこれあり候へども、大体右等の人数、日々に相救ひ、右長々の間いささかの障りもこれなく、別して東西御役所（東北奉行所）より毎々御米銭等（米二百五十石、銀二十五貫目）御下げなし下され、且又、追々施入の人々も多く（京都府内の富商たちの醵金、奉行所の補助金と合わせると一万両をこえた）右の日数一日も指支へこれなく相済み候段、社中一

同の大慶これにすぎず候事。（脩正舎記録）

梅岩教学の精神が没後百年の後にも立派に生きていたことを立証したのです。

また梅岩は『斉家論で、（家、ここではとくに町家をととのえ治める意）論』を書き、商人は身分制度では最下位、己れの利のみを追求する卑賤な者とされていたこの時代に、「我教ユル所ハ商人ニ商人ノ道アルコトヲ教ユルナリ」と宣言し、「実（マコト）ノ商人ハ先モ立チ、我モ立ツコトヲ思フナリ」「双方トモニ宜キ」ことが可能であると主張し、「何ヲ以テ商人バカリヲ賤シメ嫌フコトゾヤ」「商人皆農工トナラバ財宝ヲ通ハス者ナクシテ万民の難儀トナラン」と商人の立場を擁護し、士農工商は階級の上下ではなく、国民共同体の中の職分としての区別であるとする理念を強調しています。そしてその商人の職分とは「ソノ余リアルモノヲ以テ、ソノ不足（タラザル）モノニ易（カヘ）テ、互ニ通用スルヲ以テ本トスル」と言い「細工人作料ヲ給ルハ工ノ禄ナリ。農人ニ作間（サクアイ）ヲ下サルルコト是モ士ノ禄ニ同ジ。天下万民産業ナクシテ何ヲ以テ立ツベキヤ。商人ノ売利モ、天下御免（オンユルシ）ノ禄ナリ。」と商人が得る利潤は正当な報酬であると明言し、それと同時に不道徳をあたかも才覚のように思いこんで恥としない商人がいることを歎き、それは商人には学問はいらぬと言って学問をしないからである、商人にこそ学問が必要で、それによって商人がまとまり、商人として安住する基盤ができると主張したのです。

また梅岩は「倹約」についてこう言っています。「倹約ト云コトハ世俗ニ説クトハ異リ、我為ニ物ゴトヲ吝（ジハ）クスルニハアラズ。世界ニ三ツ入（要）ル物ヲ二ツニテスムヤウニスルヲ倹約ト云。」（『語録』一）

これは現在の〝地球にやさしい〟などといわれている環境論と全く同じです。梅岩は二百六十年も前にこれを言っていたのです。

ミュンヘン大学のホルスト・ハミッチ教授は「心学運動は階級制度による思想、信仰の分裂を克服する力をもつ啓蒙運動で、国民精神の近代化の役に立つものであった」と述べ、ハーバード大学のロバート・N・ベラー博士は「非ヨーロッパ諸国のうち日本だけが固有の伝統的価値観を保ちながら近代化を達成できたのは、江戸時代の民衆に心学の現実的で合理的な世界観が普及しており、社会的経済倫理が確立されていたからである」と言っています。

ヨハネス・ヒルシュマイア氏は一九六四年に『日本における企業者精神の生成』で近代日本の産業をきずきあげた企業家たちにとって心学が果した役割について研究し、「商人の倫理を向上させ、利益を肯定し、自由な思考を生みだし、資本主義の精神に近づいた」と高く評価しています。

現在石門心学は京都に明倫・修正の両舎、東京に参前舎、大阪に明誠舎があり、別に全国組織の石門心学があって活動を続けています。

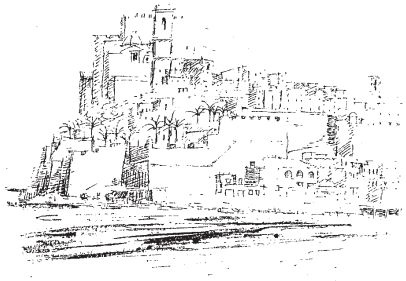
思想が人の心に浸透するのを目で見ることはできません。しかし多くの人々に広まった思想は、やがて国民性となるでしょう。そしてさまざまの事実として現れてきます。例えば日本式経営法とかです。関西の企業の経営基本方針は今も石門心学の理念を基にしているそうです。梅岩は高度成長を達成した企業家やそれを支えた勤労者の中に、今でも生き続けているのです。

それほどの人ですから、梅岩は今でも時々山崎町の空の上のどこか高いところへやって来て「ここは私の曾孫弟子（ひまごでし）が治めていたところや。曾孫弟子のその次の弟子のことは何というたらええねやろ、ぎょうさんおる筈やけど……皆がんばってや」なんて、街を見下しながら呟いているかもしれません。そんな気がするのですけど。

終

参考文献

『山崎町史』　山崎町史編集委員会　山崎町
『江戸時代「生活・文化」総覧』西山松之助　新人物往来社
『石田梅岩』　柴田　実　吉川弘文館
『石田梅岩と都鄙問答』　石川　謙　岩波書店
『石田梅岩の思想』　石門心学会　ぺりかん社
『江戸の経済システム』　鈴木浩三　日本経済新聞社
『岡山藩』　谷口澄夫　吉川弘文館
『日本思想史概論』　石田一良　吉川弘文館
『進化する日本的経営』吉村久夫　日経ＢＰ出版センター



『立待居待』

山崎文学会　浅田耕三

同窓会の案内状が届いた。

会場は日本海に面した有名な温泉場である。発起人の五人の名が並んでいた。その顔を懐しく思いうかべながら多田謙造は出席の文字の上にていねいに〇印をつけた。

前回、A市で開いてからもう十年にもなろう。退職してからもすでに五年である。

申し分のない秋晴れの当日、多田は午後一時に家を出、車を駆って国道二十九号線を一路北へ向かった。中国山地の背梁を越えるのだがK温泉へは二時間余りで着く筈だ。四時迄に会場の「HOTEL北海」へ入ってほしいという案内だったから時間はたっぷりある。途中ドライブインでコーヒーを飲んだりしながら久し振りに但馬路の秋景色をたのしみ四時十二、三分前に到着した。

すでに懐かしい顔ぶれが二十人近くも集まっていた。六十五年の人生で、同じ教室に顔を合わせたのはほんの数年だけなのに、同級生というのは不思議なもので、中には卒業以来一度も会わぬまま何十年と経っているのに、ほんの二言三言話すと昨日迄行き来していた友達のように話がはずむ。

教員養成の学校だったから、中には民間会社に勤めた変り種もいるが大部分は公私立の学校の教員退職者で、そのうち半数はまだ社教や学校の嘱託、講師などで勤めていた。

卒業したのは同じ科では百人足らずだったが、亡くなった級友も大分いる。この日集まったのは二十六人であった。

宴会は大いに気勢をあげ最後には肩を組んで寮歌の合唱などやって、さて何時頃に多田は自分に割り当てられた部屋へひき上げたのかはっきり覚えていない。

十分に飲み足りているのにまだ口いやしく部屋の冷蔵庫からビールを出して一口二口飲み、座椅子にもたれてまだ醒めぬ先程の感慨に浸っていると、突然襖ががらりと空いて幹事の一人、奥野というのが顔をのぞかせた。

「おい、京屋、楓の間に七、八人集まっとるのや。お前も来んか」

「うん、わかった。すぐに行く」

がらりと襖をしめて奥野が消えた。「京屋」というのは多田の学校時代のニックネームで、昔、彼の先祖が大阪に出て京屋の屋号で紺屋を営んでいた話を校友会雑誌に書いたら、とたんについた名である。奥野は学校時代、相撲部の主将をやっていた男で、上背はあまりなかったが闘志むき出しの敏捷果敢な相撲を取る名先鋒であった。

多田はしばらく相撲部のマネージャーの一人に名を連ねていて何度か奥野らの合宿につき合った。マネージャーを勤めたのも彼がいたからである。

コップのビールを一息に呷り、浴衣の身づくろいをして立上がろうとした時、多田はふと、妙に疲労感を覚えた。これ以上、みんなの中へ出ていくのが何となく億劫になった。

ちょっと休んでからにしようか、上げかけていた腰をまた下ろして座椅子にもたれ目をつむった。

と、しばらくしてカラッと再び襖が開いた。ああ、また奥野が呼びにきたな、と思ってそっちを見ると、奥野ではない人物がニコニコ笑ってこっちを見ていた。

「多田さん」

うん？と多田はこたえた。

「おれ、誰かわかりますか」

えっと多田はまじまじと見つめた。

「森くん？」

「ああ、やっぱり覚えていてくれましたねぇ。今日はこんな遠い所までたいへんだったでしょう。」

「ほほう、ここで森くんに会えるとはなあ。一体何年ぶりやろ。そういえば君はこの近くのT市の出身だったな。どう、元気やった？」

ええまぁと森はこたえ、座卓の向かい側に座った。多田は冷蔵庫からビールやつまみを出してすすめた。

「今日ここであんた達の同級会があるときいて、ひょっとしたら多田さんに会えるかも知れんと思うてね」

彼も余程懐かしいらしくしんみりした口調でいい、まじまじと多田をみつめる。多田も何となく感傷的な気分になりかけたが、すぐに気持ちをかえて陽気に酒を勧めた。

多田は退職してから一層酒が強くなったらしく、こんな時には際限もなく盃を口に運んでしまい、老妻からもよく叱言をくう。自分でもいかんと思って普段はできるだけひかえているのだが―。

森はあまり飲まず、思い出話に次々移る。

「ああ、それはそうと、奥さんもお変わりない？」

たずねると森はつと目を逸らし急に口をつぐんだ。あっ、何かあったな、と一瞬多田は思い、悪いことを訊いてしまった、と思ったが今更仕方がない。と、案の定、「家内は亡くなりました。ちょうど二年になります」

そういった彼の何ともいえぬ目の色に、多田は、えっと言ったきり絶句した。しばらくして、それは……といいかけたが、それっきり何も言えなかった。

「いつぞやは、といっても、もう随分昔のことになりましたけど、多田さんにはほんとにお世話になりました。実はそのお礼も言いたくて―」

じっと多田に注いでいる彼の目に涙が光っていた。

「多田さん、憶えていますか」

「えっ」

「あの時、晴美とおれに教えてくれた月の名」

「月の名？ああそういえばそんな事を言うたような―」

「あの話を晴美はいつ迄も憶えていて、生前よくおれに言っていました。彼女にかわってお礼を言います」

「―」

「いやぁ、久し振りに会いながら、つい湿っぽい話をしてしまって、ご免なさい。もう、この話は止めましょう」

彼は両手をちょっと振るような格好をし、すぐに話題かえた。

森は多田の一級下であった。

学校の寮は旧陸軍の兵舎で、学校から四キロ程も離れた赤松林の中にあった。平屋建ての急拵えのバラックだが、長い寮舎が三棟並んでいて「暁雲寮」と呼んでいた。寮生は百人以上もいたろうか。

敗戦で軍隊がなくなり、残った兵舎の払いさげを受けて手狭な学校内の寮からひき移ったらしい。多田が入学した時はもう移ったあとだったが、これもどこから運んだものか木製の机や椅子がふんだんにあった。

部屋も広く十畳程の学習室と八畳の寝室の二部屋に定員は二人で、多田が二年になった時に同じ部屋に入ってきたのが森だった。

森は色は黒いが長身で目元の凛とした美男子でニックネームが「麿（まろ）」、あの公卿の一人称の麿であった。当然女子学生にはもてたらしく、ラブレターも何人もからもらったようだが、野球部の外野手で一年生なのに五番を打ち、とにかくその野球に夢中で艶っぽい方には殆んど関心がなかったようだ。

専攻は物理で野球の練習に明け暮れているわりには成績もよかった。

三月上旬の、後期の試験も終わった暖かい夜だった。

町に出ていたらしい森が午后十時を過ぎてから帰ってきた。そして寝ころんで本を読んでいた多田の枕元へきて座った。

「多田さん」

うん？彼が顔をあげると森の真剣な目がのぞき込んでいた。

「ちょっと頼みがあります」

「何や、えらいあらたまって」

「実は食堂の外に友達を一人待たせております。今連れてくるから今夜一晩、この部屋に泊めてほしいんです」

「何や、そん事か、構わんよ、おれは」

寮生が友人を連れてきて寮に泊めることは誰もがやっていた。そんな事ぐらいをどうして大げさに断るのだろう、とちょっと不思議だったが、多田が気に止めずにいると、人目につくと困るからこの窓からいれる。合図したら窓からいす一つ下ろして下さい、と森がいう。

やっぱりおかしな事言うと思ったが口には出さずに待っていると、窓がコツコツ鳴った。外は松林に沿った小径だが街灯など勿論ない。

驚いたことに森のあとから覗いた顔は若い女だった。とにかく部屋に入れた。あっけにとられている多田に森が説明した。

名は晴美という彼の遠縁の娘で二年前に高校を出たが、結婚話がもち上がって親も親類もそれに大乗気で、相手は森の地方で分限者とか身上持ちとよばれる資産家で造り酒屋の跡取り息子、いわれるままに見合いをしそのあと何度か会ったがどうしてもその気になれない。断ってほしいと頼んだが周囲は承知せず、親と親戚がまるで総がかりのようにして結婚させようとする。

切羽詰まって森の所へ逃げてきた。一緒にどこかへ連れていってくれという。

「将来一緒になる約束でもしているのか」

多田が訊くと、森は曖昧に、いや、はっきりとは……と口の中でもごもご言いかけた。と、女の方がびっくりするような大きな声で、「ええ、そうです、私たちそのつもりなんです」と言い、大きな、きっとした目で多田を見て、それからその目を森に向けた。必死の目の色であった。森は、何かたじたじといった格好で、頭をごしごし掻いている。

こいつきっと約束しているのやと多田は直感した。

「そんならこれからどうするつもりや」

「はぁ、今夜一晩ここに泊めて、明朝早くにK駅を立ってS温泉に行き、そこで二人で一泊してから、その近くに伯母がいるので今後の相談に乗ってもらおうと思っているんです」

ははーん、と多田は腕をくみ、照れている森をつくづく眺めた。しかし女の方は硬い思いつめた表情を崩さない。

駆け落ちして既成事実を作り、酒屋の息子との縁談を壊してしまおうというのであろう。

「けど、ちょっと困った事がありましてね」

「何や」

「お金です。恥ずかしい話ですけど晴美は誰にも見られぬようこっそり出てきて着の身着のままといった所だし、ぼくもあんまり持っていません。あつかましいお願いですけど、何とか都合つきませんか」

うん、と多田は唸った。財布に入っているのはせいぜい二十円、何ともならない。友達の誰彼を思いうかべてみたが、年中ぴいぴいいっている連中ばかりで持っていそうなのは一人もいない。

多田は手をこまねき、そしてはっと思いついた。「ちょっと待っていてくれ、今、電話してくるから」

机の曳出しをごそごそやって一枚の名刺を見つけ北寮の寮監室の隣の小部屋にある公衆電話で電話した。

相手は折よくいた。少し頼みたい事があるというと、その人物は快く承諾してくれた。

「お前がそういうのはよくよくの事だろう。そんなら少し早いが七時にわしの家へ来い。H駅から歩いて十分」

そして自宅の所在地を要領よく説明した。

「そんなら明日の朝、少し早いが五時三十二分の下りでH市へ行こう。多分金は何とかなるだろう。その金持ってS温泉でもどこへでも行けばええ。ただし、何かのことでもし金の都合がつかなんだら、おれの持ち合わせの二十円で、まっすぐ伯母さんの所へ行くしかないだろう」

「有がとう。しかしほんとに都合つくんですか」

「うん、多分大丈夫や」

戦前、戦中、いなかの村で村長をしていた多田の父は、昭和十五年に結成された大政翼賛会なる団体の末端組織に参加させられていた為に、戦後占領軍司令官マッカーサーの命令で公職を追放された。

戦争協力者とみなされたのだが、翼賛会に進んで入ったわけではない。中央政府や県の命令で仕方なく入れられたのだが、その為戦後は職を奪われ、その上恩給（年金）の支給までストップされた。

その上悪いことにこれも占領軍の命令で実施された農地解放で、田は小作人の権利ばかりが保護され、それ迄多田の家に入っていた小作米は泡沫の如く消え去った。彼の家は落魄逼塞の一途を辿り、彼の学資は中学校の教員をしていた長兄が安月給の中から幾何を送ってくれていた。

だから彼も金のない事にかけては人後に落ちなかったが、しかしあの時代は、誰もが似たりよったりの貧窮ぶりで、卑下することは豪もなかった。景気のよいのは闇成金ぐらいだったろう。

彼がこの時ふと思いついて電話したのは、父の従兄である。この人物は父とはよく気が合って若い頃は一緒に事業をしていた。

父がいなかにひっ込んだあとも、K市で会社をやったり、新聞社の役員をしたりする事業家だったが、この頃は城で名高いH市で「H新映配」という洋画専門の映画館の重役も兼ねていた。

映画好きの多田は時々、汽車で二、三十分のH市に行き、同姓で康郎というこの小父さんの名を木戸でいい、無料で映画をみていた。康郎氏は殆ど不在だったが一度だけ、モギリが連絡したらしく、幕間に館内放送されて多田は専務室に呼ばれ、小遣いをもらった上、困ったことがあったらいつでも相談にのってやるからといってもらった。

彼の家の事情をもちろん知っているのである。しかしそれ以来多田は、館の入口で必ず康郎氏の不在をたしかめてから入ることにした。

映画はみたかったが、小遣いをもらうのはさすがに気がひけたし、父が困るだろうと思ったのである。

しかしこの時は、二人のために何とかしてやりたい気持ちで一杯だった。というのは、晴美という女性の目の中に、何か尋常ならぬものを見てとったのだ。

森が途方にくれて親元へ返しでもすれば、あるいはこの女は死ぬのではないだろうか。ひょっとしたら一途な女にひきずられて森の方も、とそんな危うさを感じたのである。

百円の無心に、康郎氏は快く百五十円出してくれた。

「卒業して働きだしたら必ず返します」というと、うん、そうしてもらおうと一笑して大きく頷き、そして急に声をひそめた。

「女だろう。いやいや言いわけなんぞせんでもようわかっとる。わしにも覚えがあるからな」

そしてまた一つ豪傑笑いをして多田の肩をぽんとたたいた。

◎

多田は卒業して郷里の播州へ帰り、中学に勤め、数年して高校へかわった。森はK市の小学校へ就職し、大学附属の小学校に転勤したあと、県の教育委員会に勤めた。

附属の勤務時代に念願叶って、晴美さんと結婚した。式には多田も呼ばれた。どうしても抜けられぬ用事があって出席はできなかったが、あの晴美さんと結ばれた森の幸福を心から祝った。

その後、県下の教育関係の研究会の時など偶然森と顔をあわすことはあったが、校種が違うこともあって、出会う機会は次第に少なくなった。手紙のやりとりも若い頃は、時々していたがそれも時と共にだんだん稀になり、いつの間にか年賀状だけになってしまった。

その年賀状も退職後のここ数年、途絶えてしまっていた。

◎

その晩、したたかに酔っ払った多田は、森が帰った時の記憶が殆どない。何か耳のそばで彼が言った気がするのだが、意識がもうろうとし何もかもがぼんやりしていた。かすかに覚えているのはたった一つ、帰り際にまた彼が「月」と言ったように思うぐらいだ。

翌朝、多田は八時の朝食をしらせる放送で目覚めた。

深酒しても二日酔はあまりないという有難い体質の多田は、顔を洗ってすぐ階下へ下りていった。

朝食の席にはほとんどみな集まっていた。

幹事の五人が座っている近くの席に多田が着くと、むかい側の奥野が言った。

「ゆうべ、おれが呼びに行ったのに、お前とうとう来なんだな」

「ああ、それが、行こうと思っていたところへ、懐かしい男がひょっこり訊ねてきてくれてな」

「懐かしい男？おれの知ってる人物か」

「うん、そりゃ知っているだろう。一級下で寮にいたんやから」

「ふうん」

「誰やと思う。ほんとに何年ぶり、いや何十年ぶりやろか―」

「へええ。で、誰や」
「T中学から来ていた森、森奈津夫君が訪ねてきてくれて一緒にビール飲んで、さぁ、十二時頃まで話したかなぁ、ほんとに懐かしかった―」
とたんに奥野が怪訝な顔をして多田を見た。その隣に杉山も北垣も唖然とした顔でこっちを見ている。
「何や、お前ら、妙な顔でおれを見て。一体どうしたんや」
そしたら奥野が、木に竹を接いだような性急な調子で言った。
「これからみんなで日和山海岸へ行ってみようと相談したんやが京屋どうする。日和山から西へ、国道九号に出る海岸線の眺めは、すばらしいのや。一七八号線やが、山陰海岸国立公園でな」
「うん、もちろんつき合う。秋晴れの日本海はええ眺めやろ」
そんな話題で食事を終え、部屋へ帰って服に着替えフロントのソファーに腰を下ろしてぼんやりしていると奥野がきた。
「おい京屋、ゆうべは大分まわっていたな」
「うん、ちょっとやり過ぎたな」
「軀は大丈夫か」
「ああ、まあ大体快調という所や」
しばらく黙っていた奥野が、妙に言いにくそうに、お互い、軀だけは気をつけようや、という。多田は適当に相手していたが、その会話の退屈さにだんだんいらだってきた。
「近頃、医者にかかった事は?」と又同じような事を訊く。
多田は少しずつ腹が立ってきたけれど、久し振りに会った友人に怒った顔を見せるわけにもいかない。
「うん、少し血圧が高うて一日一錠の薬はもらって飲んでいる。それに以前から緑内障の気があって、目薬をさしている。症状は安定している」
「他にはないな」
「うん、ないけど、お前変やないか。一体どうしたんや」
「いや、気分を悪くされると困るんやが、一つ思い切ってたずねてみる事にする。お前、アルツハイマーの気なんてないやろな」
「おい、わしは十年ぶりの同窓会た出て、折角愉快な気分になっとるのに、怒らせる気か。一体何の恨みでそんな……」
「―いや、お前がそういうのも無理ないのやが、先刻、飯食いながら、お前妙なこと口走るから、心配になったのや」
「妙なこと? 何やそれ」
「森が訪ねてきた、なんて言うたろう」
「うん、言うた。ほんとにゆうべ、会ったんやから言うたが、それがどうした」
「さぁ、それや」
「うん?」
「実はな―」
奥野はつと声をひそめた。
「森は、もう一年半も前に亡くなっとるのや」
えっと多田は声をのんだ。爪先から頭へつーんと冷たく硬いものがはしった。
「ま、まさか。しかしわしはたしかに昨夜―」
「いや、おれはお通夜にも葬式にも出たからたしかな事や」
多田は物を言うのもしんどいような、変に軀がだるかった。
「おいっ大丈夫か、京屋ッ、伊助ッ」
その声が少し遠くから聞こえてきた。ああそうや、京屋伊助は、おれのニックネームのフルネームやった。
懐しいな、何年ぶりに呼ばれたやろ―。
「ちょっと、ちょっと待っとれッ」
奥野がもってきたワインを飲まされて、多田はやっと正気にもどった。
「いや、もう大丈夫や。心配かけてすまなんだ。話をきかせてくれ」
「うん。ほんとにええのやな」
ああ、と多田はうなずいた。
森は晩年K市から郷里の北但馬へ帰って二、三の小学校校長を歴任し、地域や子供達の評判もよい名校長だったが、退職したのは定年の二年も前であった。
部下の職員が冬季、車のスリップ事故を起こし、同じ学校の児童一人を死亡させてしまった。

責任を取る形で森は辞表を出して職を退いたが、その一年後、今度は晴美さんが病死した。夫婦には子供は男の子が二人あったが、兄は東京、弟は仙台で二人共帰ってくることはめったになく、どういう事情からか親子の間は音信も途絶えたままだったらしい。

夫婦仲は齢をとっても近所でも評判のよさであった。その愛妻に死なれて生きる張りを失ったのだろう。

妻の所へ旅立つことにする、どうか捜さんでほしいという親戚あての書きおきをただ一通残して家出した。几帳面な彼らしく身辺はきちんと整理され、財産分与のことも依頼してあった。

数日後、西のT県の池の中に死体が浮いていた。池一面蓮の池で、その根にからまれて死体は浮き上がらぬ、と考えたのではないか、とまわりの者は推測したが、むろん、真意はわからない。

池畔の道路を車で走っていた人が岸から三十メートル程離れた青い蓮の葉の中に、白いシャツが見えかくれしているのを発見して警察に通報した。

◎

何台かの車に分乗して多田たちは一七八号線を西へ走った。車窓に見え隠れする海岸線の美しい風景はさすがに国立公園の名に恥じぬ見事さだが多田の目にはただいたずらに前からうしろへ流れるだけであった。

昨夜の森の声も姿も曖昧模糊としているけれど「月」という言葉だけが不思議に耳に残っている。そうか、あの時の礼を言いにきたのか、と多田は納得した。そしてはっきりと思い出した。

「ぼくと晴美は駆落ちするけど、プラトニックラブやからね。誤解せんで下さいよ」

H市へ向かう汽車の中で彼は言った。

今から四十年前の、これが日本の通常の若者だった。現代の日本人とはまるで異人種の謙虚さと潔癖さを持っていた。

南寮の一室でその夜、森の布団で晴美さんは眠り、多田と森が多田の布団で寝た。窓から松の木の間越しに、十三夜らしい月が見えた。

森が起きだして椅子に座った。多田も起きて向かい合って掛けた。

「眠れんのか」と多田が訊くと森はうなずき二人は黙って窓外に目を向けた。

空は冴え渡っている。月の光に松の葉が露に濡れたようにキラキラかがやいていた。

播磨平野の丘陵地は見渡す限り畑地である。白く烟った縹渺たるそのゆるやかな起伏のはるか向こうに、人家の灯が五つ六つ見えた。

多田はふと黙っているのに息苦しさを覚えた。

「月の異称を知っているか」

多田が言うと、いゃと窓越しの月光の中で森が小首をかしげた。

多田は国語の専攻である。

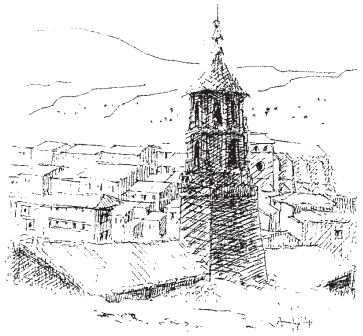
十三、四夜の小望月、十五夜の望月、十六夜、十七夜の立待月、十八夜の居待月、十九夜の寝待、臥待、二十日の更待—。

「月の出はだんだん遅くなるから十七夜は立って待つが、十八夜は居て、つまり座って待ち、翌夜はもう寝て待った、だからこんな優雅な名がついたのやろう」

「千年昔の人はみんな早寝早起き、日が暮れると床について、夜明けに役人たちは出勤していたらしい。しかしそうそう眠れるものやないから美しい月を眺めて思いにふけった。月影は昼間垣間みた異性の顔に変わり、恋が生まれ、歌が生まれた、のやろうな—」

—いざよい、たちまち、いまち、ねまち、やさしい、ええ名……

晴美さんが闇の中で小さく呟くのがきこえた。



「教育」再考

茨城大学教授　尾崎久記
（山崎町高下出身）

「教育」ということばを聞くと、すぐ思い浮かぶのは「学校」という場でありましょう。これは、社会が組織的・系統的に子どもを育む場を「学校」としてつくって運用する形態であり、そのような営みは「学校教育」なる言葉で総称されております。「学校教育」以外にも、「社会教育」、「生涯教育」、「幼児教育」、「職業教育」、「産業教育」、「通信教育」など、「教育」の前にいろいろな言葉が付けられて、営まれている様々な内容・形態の「教育的営み」も存在します。いずれの「○○教育」であれ、それら○○なる用語で規定された「教育的営み」を意味しております。しかし、これらの狭義の「教育」は、連綿たる人類の営みからすれば極めて最近の形態であり、「学校教育」ひとつ見てもわが国においていわゆる近代公教育が開始されてからやっと一世紀を過ぎた程度であります。

では、原初、「教育」はなかったのかと言えば、それは厳然としてありました。すなわち、親から子へ、前の世代から次の世代へ、集団から別の集団へと伝えられた、言語、生活様式、文化様式、社会規範、生産技術、等々。実に様々な知恵や文化がいろいろな方法で受け継がれ、伝承・継承されてまいりました。子どもは、児童・生徒である前に一人の人間として、「生活の知恵」とも言うべき様々なメッセージを社会から受け取り、それを活用して更に新たなる「価値」を再構築しているのです。このような、広い意味での社会の「教育的営み」を背景としつつ、狭義の「教育」を担う専門機関である「学校」が社会の中で、その存在を認知されるに至ったのです。そのような知恵や文化が世代を超えて伝わる過程では、そのまま同じものが単にコピーされるような伝播ではなく、受け渡す側と受け取る側との関係性や受け渡し方法などは様々であり、それ故に、多様性を含みつつ時代にマッチしたものに変化し続け、現在に至っているとも言えましょう。さながら、それはＤＮＡの組み合わせにより決まる遺伝情報が、世代を超える度に種固有の情報を含みつつも、新たな組合せも取り混ぜて再出発するかの如き様と似ているともいえましょう。

それではそのような広義の「教育」について、現在の状況について再考してみましょう。子ども達が生きている今の状況に想いをめぐらせると、何が見えてくるでしょうか。「今の子どもは変わった」、「むかしは、……」なる声をしばしば聞きます。しかし、本当に子どもは本質的に変わってしまったのでしょうか。少なくとも、ＤＮＡや遺伝子を見る限り、そんな短時間の間に変わったと思える証拠は見当たりません。むしろ、人間を規定する遺伝情報は、一〇〇年程度の短期間ではほとんど変わらないのではないでしょうか。それでは、何が「今の子どもは変わった」と大人に思わせているのでしょう。

その答えは、子ども達が生きている現在という状況に想いを巡らせるといろいろ見えてきます。そこには親や教師達が育った時代にくらべて、生活の中で営まれるプロセスがはるかに短縮された〝豊かな社会〟があります。たとえば「レンジでチン」なる言葉で代表される冷凍レトルト食品を電子レンジで加工する究極の「インスタント調理」もあります。それは「食べたい時に食べたいものを食べる」ことを可能にした「調理革命」と言っていいでしょう。また、郵便局の数よりも多いコンビニエンス・ストアには、〝いつでも〟食べられる食材が並べられています。それらを利用しないこともできますが、その便利さの誘惑から逃れきるのは難しいかも知れません。「生活におけるプロセスの短縮化」は、全自動洗濯機、ボタンひとつで沸く風呂など、他にも日常生活に数多く見出すことができます。その結果、私たちの生活は便利で快適なものとなり、子ども達も無数にあるボタン操作を自在に操る技を身につけています。しかし、便利さと引き換えに失ったものも数多くあります。かつては子ども達が絶えず目の当たりにしていた生産的・創造的過程を体験する〝チャンス〟は省かれ、出来上がるまで我慢して〝頑張ったり〟、〝わくわくして待つ〟ことからは遠ざけられてしまいました。そのような生産的・創造的過程体験の喪失は、家庭においてだけではありません。産業構造の変化にともない、かつては地域で営まれていた様々な生産機能がだんだん見えにくくなってきているのです。

社会の変化でもうひとつ注目されるのは、情報通信技術の高度化による「社会の高速化」です。テレビはもとより、コンピュータ、ファックス、携帯電話、インターネット、高速ゲーム機器などが普及して情報が地球規模で飛び交い、それが社会システム、コミュニケーションの仕方、人間関係にまで影響を及ぼしております。「クロックサイクルが高速化されたハイテンポな社会」の出現です。子ども達に毎日関わる親や教師もそのような高速化された社会に生きており、「早くしなさい」や「さっさとしなさい」などと子どもに迫るのも当然の帰結なのかもしれません。

親や教師が、「昔の子どもはこんなではなかった」と言ってもそれは過去へのノスタルジーであり、何ら解決の糸口にはなりません。子ども達は教師や親達が育った時代ではなく今を生きているのです。変わったのは子ども達が生きている今という社会環境であり、本来的に子どもがそんなに変わった訳ではありません。クロックサイクルが高速化した社会の中で生きてゆくのは大人でも結構エネルギーを必要とします。子ども達が生活する社会がハイテンポに移行するなかで、多くの子ども達は健気にもそのテンポに合わせながら育っていることに、感動すら覚えます。しかし生活が高速化するにつれてそのリズムに乗りきれず、結果的に振り回され、要領のあまり良くない子どもやテンポのずれた子ども達がいろいろな症状を呈してシグナルを発信しております。

今後、「社会の高速化」は更に進行することはあっても、後戻りすることは難しいでしょう。社会の変化を敏感に受け止めて反応しているこのような子ども達からのシグナルをきちんと受け止め、人類がかつて経験したことのない高度情報化社会にふさわしい子育てシステムの模索がすでに始まっております。

著者のプロフィール

昭和24年（1949年）生まれ。菅野小学校、菅野中学校、山崎高校を経て、昭和47年（1972年）東京教育大学教育学部卒業。東京教育大学大学院教育学研究科博士課程、東京教育大学教育学部助手、茨城大学教育学部助教授を経て、平成６年（1994年）より茨城大学教育学部教授。名古屋大学にて博士（医学）号取得（平成７年）。スイス・チューリッヒ大学医学部客員研究員（昭和57～58年：神経科、平成11～12年：精神科）。専門は脳波・事象関連電位・脳血流計測などによる「認知神経科学」。茨城大学では「障害児の生理・病理」担当。日本特殊教育学会常任理事・編集委員長歴任（平成13～15年）、現在、茨城大学教育研究評議員、日本臨床神経生理学会理事、日本生理心理学会理事、日本ブレインヘルス協会理事。

第二十六回春の芸能祭ご案内

日　時　平成十八年五月二十一日（日）
午前十時から午後四時まで

場　所　サンホールやまさき（山崎文化会館）

主　催　宍粟市山崎文化協会・山崎文化会館

後　援　神戸新聞社・宍粟市教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、ご案内申しあげます。

参加部門　山崎詩舞道連盟　山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ　播州山崎太鼓
山崎民謡連合会　山崎町老人大学

（平成十八年三月現在の名称で掲載しています。）

短歌

稲村幸子氏第三歌集『橋掛り』を読む

山崎歌人協会　栗山節子

清新な老境の抒情

『橋掛り』は、『苧環集』『西鹿沢』に次ぐ稲村幸子氏の第三歌集で平成十六年十二月に上梓された。後書に、「齢すでに九十四歳。喩えて恐縮ながら、能の演者が、今「橋掛り」を切幕に向かって入りつつあるところでありましょうか」と記されている。歌集名の由来である。

『橋掛り』は平成四年から十六年までの四七〇首が年代順に納められている。従って頁を追って鑑賞することにする。

咲き垂るるさくらは苑の池水に今や触れなむ危ふさにあり

集の巻頭に措かれた「岡山衆楽園」での一首。しだれ桜が水面に触れんばかりに揺れながら影を写している情景に自身の姿を重ねた「危さにあり」の結句には、老境の深い想いが内包されていると思う。

・臨終をいつと知らねば立ち枯れし梅に末期の水も遣らずき

銘をさそう作品となった。

・菰被る牡丹よ傘さす寒菊よわれも籠らむいまひと冬を

・ゆづりはの広葉を濡らす梅雨のあめ何を譲りて畢らむわれか

・雨に日に身を晒しつつ白みゆく半夏生なにの禊かすらむ

・闇に浮く夕顔にながく佇めり人のことばの裏読みがたく

多くの秀歌の中から叙景歌に托された心象に沁々とした味わいを感じ心に残る四首を抄出した。

・もしかして百まで生きるやも知れぬ雀に言はれてゐるやうな朝

・モスコーシモスコーシとぞ啼く蝉の畢りて老軀一夏越えたり

・エイヤッとかけごゑするにあらねども世紀の節目杖曳きて越ゆ

・のほほんと卒寿生きをりにんげんに賞味期限のなきこそよけれ

飄飄と老を昇華した心象詠である。

・七十年歌やめざりし理由とす　歌がわたしを捨てざりしこと

・西方は十万億土すり足にわれの一世やいま橋掛り

少題「橋掛り」八首は現在の心境の総括と記されている。まだまだ多くの秀歌に心を残しながら、最後に氏のご健康を祈り終りとしたい。

各地短歌祭入賞入選作品

◇第十七回　神戸短歌祭

（四月二十九日・県民小劇場）

・神戸新聞総合出版センター賞

一輪車にやっと乗れし子の息弾む
地球一周してきたように　岡本　光代

◇第一回　宍粟市民短歌祭

（九月四日・宍粟防災センター）

・兵庫県知事賞

なみだ顔つくろひ戻る病室に何時よりか待つ夫の眼に合ふ　伊東まさ子

・兵庫県議会議長賞

ひとつふたつと指を数える幼子に十一からはわれの指貸す　佐伯恵美子

・神戸新聞社賞

水不足深刻となり涸れがれの川を見てをり百姓の目に　北　隆治

・宍粟市長賞

ゆゑもなく心渇く日図書館に上村松園の画集をひらく　澤田みち子

・宍粟市議会議長賞

後をつぐ子と山に来て境界の杉に

わが名をいれつつ登る
石原　幸夫

・宍粟市教育委員会教育長賞
五年余を戦いぬきて捕虜となり多くを語らず夫は逝きたり
高尾とみゑ

・宍粟文化協会長賞
言ひにくき話の糸口さぐりおり鈴蘭の鉢に水やりながら
安原　定子

・宍粟市歌人連盟賞（山崎町のみ）
亡き父に似合いし背広ゴミに出せど雨降りくれば抱きて帰りぬ
伊野　和子
手術後の食の断たれし夫のかたえ音をひそめて朝食を摂る
南光美代子

・楠田賞（兵庫県歌人クラブ代表）
八反の籾蒔き終はりばら園に夫と来て飲むコーヒーの味
武内　千鳥
満開の桜並木を走者ゆく老も若きも花びら浴びて
織金　貞子

・県歌人クラブ賞
沈丁花をブローチにして我が若き胸に飾りき戦える日に
戸田　葉月

◇第十七回 ふれあいの祭典短歌祭

・兵庫県歌人クラブ賞
歩くとは少し止まると書く故に少し止まりていなごと遊ぶ
菅谷美津子

◇西播磨短歌祭（平成十七年度）

（十月五日・西播磨文化会館）

・兵庫県議会議長賞
店頭の暑きに並びゐる西瓜買はぬ人にも叩かれてをり
安東はつ子

・奨励賞
如雨露に止まりしホタル手に包み逝きたる吾子に見せてやりたし
織金　貞子
七階に住ふ谷さん知らねども置き場に自転車よく隣りあふ
釜付　靖子

・佳作
我が咳をまねする孫よ口びるにもみじのような両手を当てて
西川スズ子

◇三田国際短歌コンクール

（十月二十二日神戸三田新阪急ホテル）

・秀作賞
気配して振り向く時に山麓の昼たたきつつ駆け抜ける雨
南　裕之

山崎柏野短歌会近詠

声出さばなべて毀れむ黙（もだ）の中　古木の梅は笑って咲けり
近嶋　タミ
湯どうふの湯気の向こうの夫に聞く暗きニュースの日本の行方
菅谷美津子
今日よりは山の囲める吾が町も市になるという　うらうらと春
山本　正子
若葉もるる幼稚園児の歌きこえ病床の夫がかすかに笑みぬ
久保みや子
自（みず）からを頼む他なしさむざむと厨に朝餉のパン焦がしつつ
南　裕之
朝日さす秋の川面のおだしさにひとり憩うか風に立つ老人（おいびと）
森元　満子
さりげなく己が病名かたる兄のこわばる笑みをなぐさめかねつ
丸井　敏子
北風に手を広げつつ紅と黄のもみじ散りゆく夕やけこやけ
織金　貞子
（アラスカ・サプライズ氷河）
七百年眠りし氷河　今我のグラスの中で輝き溶ける
小田　博己

水甕・山崎グループ詠草

ラベルには一粒の麦と書かれをり夫が買ひ置きし焼酎の瓶
植本　澄子
未知の世界今向く足先わずかでも幸せ待つ道と信じて行かむ
小川千代香
葉を落とし瘤盛り上がるもみぢの木臥龍となりて冬庭を這ふ
小林　良子
神島に夕日の入りし五時十一分光の雨はしきり輝く　高井　麗子
蜘蛛の巣につかまりて枯葉身をまかせ風が操るマリオネットに
千本　安子
ベランダに重たく垂るるつるし柿口にする日を娘と待ちをりぬ
堀　ひづる
裏庭の紅葉の古木枯れゆけりわれこそ見しとひとに伝へむ
堀谷　直子
柿の葉の落ちてくるくる転ぐ道手押し車の老母もどり来
山口　澄代
畑より泥つき大根持ち帰る夫を待ちゐて土鍋火にかく
山根　直美
授業終え楽器片手に髪なおす窓に映りぬ乙女の姿
千脇久美子

俳句

音水湖、林檎園を訪ねて

十月十七日午前九時出発、波賀町楓香荘の車が、西信駐車場のところまで迎えに来て下さっていた。十一名参加、お天気に恵まれ幸せそうなお顔振れが次々乗車。

前日の十六日秋祭りだった伊和神社前で降ろしていただき、仕舞われていたおみこしの掛物を観せていただく。近くに見るおみこしの掛物は遠く観るのと違い、とても立派だった。金、銀、綾錦の織物は豪華そのものだった。倉庫といっても高い立派な建物だった。

・山車（だし）倉の太き閂柿（かんぬき）日和
山口　栄子

引原ダムへ向かう。幾十年前湖底に沈んだ奥谷村引原集落。神秘的な湖の水の表情。

・四方の景ダム湖に沈め山眠る
石野　光栄

山崎俳句協会
青嶺句会　芦田八重

・波賀の山映してダムの水澄めり
永井とみ代

・秋冷や湖底に思ひ馳せてをり
杉山美保子

・紅葉の染しダム湖や哀愁めく
田中　良子

・故里の眠る水底秋のダム
芦田　八重

長源寺前の湖畔に富田砕花の歌碑が、静かなたたずまいを見せていた。

林檎園へ向かう。車中より見えるそうめん滝を教えていただく。そうめんを流しているような白い小さな滝だった。

りんご園の入口で、私達を迎えてくれたのは返り花だった。淡い夢のようなやさしい花。

・柔らかき陽ざし集めて帰り花
福田　泊水

・ほのぼのと淡くやさしく返り花
下村　君子

・深山なる華やぎ淡き狂い花
畑　千里

窓口で、小さく切った試食の林檎をいただく。園内はもう林檎は終りなのか人はまばらだった。木の葉隠れから見る青空は高く澄みきっていた。

・林檎園一期一会の人優し
秋久　光子

・道草や今日もぶらりの烏瓜
茂田　茂太

楓香荘にて昼食をいただく。少し寒くなっていたので、茶碗蒸しがとても美味しかった。

吟行日和の小さな秋の、小さな旅だった。

さわらび句会詠草

春時雨湖面に鳥の烟りたる
山岸その子

夜桜の千鳥ヶ淵に愁抱き
本條　淑子

余生今流るるままに春の雲
小林　紫生

吊橋にからむ山藤風にゆれ
川崎　栄子

雷神のもんどり打つや黒き雲
薄木満寿恵

たそがれやすでに序曲の虫しぐれ
壷阪加代子

髪長きユダヤ教徒は秋日浴び
庄　昌子

絵ガラスの窓の灯りや時雨きて
藤井　七代

平和願ふアンネの薔薇の返り咲き
山中　正子

朱倫句会詠草

一千燈焔の祈り秋祭り
藍　千恵

蝉しぐれ耳だけ見えし摩崖仏
井口　洋子

ぶらんこもジャングルジムも撤去され
木村　今子

ジーンズの裾のほつれや五月祭　小嶋　弥生
攻める刻引く刻あって秋の月　小林　優
秋霞山幾重にも青きまま　佐倉　涼子
秋澄んで澄むことのない世におりし　須藤　淳一
青春に出会ふ一日のアマリリス　千種　洋子
はんなりと京都昏れゆく春霞　ひいな蒲公英
青葉風山門すこしゆるみたり　藤井　弥生
栗の花翁の面の夢をみた　福井　清翠
眼球の抜け落ちし跡長崎忌　福井　泰好
炎天のところどころ風のむら　空木　章
村百戸守りて在す良夜かな　三浦　ゆき
流星の人の願ひが飽きた頃　睦月　晴香
とんぼうよ宇宙つらぬく棒探す　岸野　皓馬

青嶺句会詠草

年明けぬ健康といふ宝抱き　芦田　八重
梅雨しとゞ無縁仏の苔衣　秋久　光子
片空は晴れて時雨るゝ峡の村　石野　光栄
独りには独りのリズム古茶を汲む　大谷　延子
何時か来る別れのやうに花の散る　下村　君子
鈴虫の同居してゐる四畳半　茂田　茂太
ものゝ芽を慈む如陽の光　杉山美保子
四方の山日毎彩かへ村時雨　田中　良子
介護の手休める日無く花便り　鳥羽チエノ
別れかも知れぬ見舞や時雨道　永井とみ代
一徹の父の面影パナマ帽　秦　千里
やはらかき土の匂ひや犬ふぐり　藤家　千代
東風吹くや大地ふくらむ雨の音　山口　栄子
中空に消えてまた飛ぶ蛍狩り　和田千代子
夕風にゆるゝ夕顔楚々として　三浦　ゆき
霊山の鐘の余韻や花曇　福田　泊水

山脈句会詠草

九九を読む声透き通る秋の夕　浅田　蕪耕
秋澄むや婚儀のチャペル朝日さす　池田　陶瓦
蒜山の馬柵（ませ）の果てなる雲の峰　宇野　幸子
降り立てば夜寒の駅に母の待つ　大西　敦子
戦後六十年
国のため露と消えヒト忘れめや　大部　正勝
あるがまま枯葉の積る城の跡　栗山きよみ
大日の胎内にゐる秋日和　新間　立風
花野行き山の学校参観日　田中　恵
吾子はるか父母なほ遙か雲の峰　畑林　和枝
枯尾花光あつめてざわめけり　福田　祥栄
石子佛落葉錦のしとねなる　前野　房子
背にもみじ鹿子（かのこ）葛根を掘り尽す　正岡　東峰

山崎町の史跡巡りⅡ

山崎郷土研究会
春名俊夫

○二年号に前事務局長の故岸本正理さんが、当会の建立した史跡標柱の一部を紹介されましたが、今回は、続編として建立を始めた頃のことを紹介します。

この事業の趣旨は、歴史豊かなこの古里は、中世は赤松氏を初め戦国の豪族達の築いた山岳砦や山城が多くあって、因幡・但馬・播磨の国が接し会う要衝の地であり、戦国以前から多くの戦跡や、物語が伝えられていました。しかし、色々な史蹟は、時代の流れと共に、土地の状況も変わり、史蹟と言っても名ばかりとなっている処が多くなっているので、郷土研究会は、この失われつつある史跡をおしみつつ、その跡地に、歴史の由来を刻んだ石柱を建ててきました。

建立年度の古いものから紹介します。

一、山崎城本丸跡（昭和五十一年）

山崎城は別名鹿沢城と称し、元和元年に松平石見守輝澄が宍粟郡三万八千石の領主として入封し初めて築かせた平城であります。本丸は三方を薬研堀の内濠でかこみ、南は自然の崖地を利用して川水を引き込んだ濠をめぐらし、東西に二の丸を置き、中堀を経て三の丸を置き、三の丸には上士の士族屋敷を配置し、三の丸の外に外濠を廻らせて町屋と隔絶し、諸門を設け城下町の陣容を調えました。後は説明を省略します。

二、山崎闇斎先生出身地

山崎町西鹿沢闇斎神社長屋門外側に立つ。

三、本多侯下屋敷跡

山崎西中学校校門西側に立つ。

四、旧因幡街道道標

山崎町山田国道二十九号線東側岡田氏宅前に立つ。

五、揖保川高瀬舟船着場

山崎町中広瀬宍粟橋西詰北約一〇〇米高瀬船波止場の上に立つ。

六、内堀の跡

山崎町本鹿沢駐車場に立つ。

七、埋御門跡

山崎町山崎小学校プール西隅。散歩の途中にでも訪ねて下さい。

山崎植物同好会の活動について

山崎植物同好会　久宗丑雄

山崎植物同好会は、自然に親しみ自然を愛する者、三十名程の男女が昭和六十年八月に山崎八幡神社の森で第一回の植物観察会を実施し、シラカシ・アラカシの樹林でシイの大木を観察して以来二十余年、今年度最後の十一月十三日の山崎最上山のもみじ観察会で百七十六回の観察会となりました。

この会は、毎月一回、宍粟市内の各地の山林で植物観察会を実施しています。蔦沢地区の岩上神社の原始林、瑠璃寺境内の豊かな植物の種類の観察、波賀町の音水、赤西国有林での原生林や紅葉の観察会、安富町関の鹿ヶ壷の植物観察、千種町の西河内の山林、宍粟の地には自生していないと言われていたカタクリの群生地が、一宮町繁盛地区で発見され、毎年四月の観察会は、ここ数年は、カタクリの観察会となり、数千本のカタクリの花に接し強い感動を受けています。また、観察会によって山崎町内の山地でもカタクリの群生地を発見しました。

毎年八月の観察会は、観光バスでの遠出となり、六甲山頂の高山植物園、鳥取県と島根県にまたがる大山のブナ原生林観察会、数年前には参加者が百名の多数で観光バス二台で滋賀県の伊吹山の高山植物園の観察会を実施しました。

山崎植物同好会の活動が県に認められ、平成八年一月二十二日　兵庫県知事より「くすの木賞」を贈られ表彰状と立派な楯を戴きました。表彰式に私が出席し県知事より授与されました。

植物同好会員も百数十名の多数となり、遠きは大阪、神戸、明石、姫路、竜野、林田、新宮方面より多数の方が毎回参加されます。

このように山崎植物同好会が充実発展するのは、常に温かく指導して下さる植物権威者の内海功一先生、本会の副会長の井口武一先生、毎月の観察会の案内状を発送して下さる鳥越茂先生、毎回現地で植物を写真に記録して下さる伊藤一郎先生等のご尽力の賜と感謝しています。

植物観察会当日は、午前八時半、山崎小学校前の広場に集合し、会員の自家用車二十台程で観察地へ出発しています。植物同好会に参加ご希望の方はお申込み下さい。歓迎します。

念願の県大会優勝！

山崎囲碁同好会
吉岡章雄

この度、赤旗全国囲碁大会の県予選に優勝することができました。十二月十日・十一日と祝賀会を催していただき、喜びもひとしおです。

思えば各棋戦の県大会決勝で敗れること四回。朝日アマ十傑戦では、半目差（最少差）で東京行きを逃したこともありました。自分には優勝は縁がないのでは…と内心思っていた矢先、まだまだやれると碁の神様に励ましていただきました。

私たち囲碁愛好家は、日頃より盤上での手談を楽しんでいます。「私はこの手がいいと思うのですが、あなたは…」「いやいや、この手の方がいい。」「なるほど。でもそれは欲が少々深いのでは…」などなど。それが県大会常連クラスとなると「よく研究してますね。その手がありましたか。」とか「この難しい場を読みきりましたか…」とか手談の内容も高度になってきます。

さらに精神的にタフでないと勝ち上がれません。少々失敗しても、顔色一つ変えない人は強い。二、三回勝っても「休憩などとらず、さっさと次の試合をやりましょう。」という人も強い。「決勝戦か、ドキドキするな。」という人は負けやすい。「この大舞台で碁が打てるのは幸せ…」という人は勝つ可能性大。

心技体を鍛える重要性は碁に限らず、全ての競技にあてはまるものですが、私はこの度、それに加えて仲間の大切さを実感しました。私の優勝をわがことのように喜んで下さる仲間たち。ひょっとしたら、私はこの人たちに喜んでいただくために今までがんばってきたのかもしれません。

「先生、祝賀会の日程ですが。」私の夢の中では、もう次の祝賀会の打ち合わせが始まりました。あとは優勝を現実という形にするだけ。碁盤を前に心を静め、石を持つ手に力が入ります。

茶道と私

山崎茶華道協会
小原千鶴子

茶華道協会にご縁を頂いたのは、私が学生の頃、先々代の谷川善勝先生がお作法の授業にみえていたのが始まりです。

先生は凛とした中に格式のある茶羽織に袴姿で、いつも微笑ましいお顔が厳格さに一段と印象的でした。

広い和室に一クラスの生徒が向き合って正座し、まるで座禅の修業をしているようでした。

初めに、真・行・草のお礼の仕方とご挨拶を学びましたが、二時間続いての正座は若い時は、どうして耐えたのだろうと今の学生をみていて思います。お話の中で「日本人から茶道を除いてしまうと無茶苦茶になりますから、自分を磨くには生活に直結している茶道が一番の近道であり、美しく生きて行くには、大きな財産です。決して驕ってはなりません。自分には質素に無理のない生活の反面、うるおいのある、匂いが外に漂う様な人になってほしいと思うのです。

人の一生は川の流れに例えれば決して穏やかにばかり流れているのではなく、時には淀みもあり、又、急流となったり、石に砕けたりしながら海へとそそぐのです……」と。

だんだんと忘れられようとしている昔から伝わる日本の古い文化を、私達のたゆまぬ努力によって後世に伝えて行きたいものです。

能楽とは

謡曲同好会
伊野操治

能とは日本伝統芸能の一つで、せりふと歌（あわせて謡という）楽器（囃子という）と、役者の動きによって表現される歌舞劇であり、能にたいして狂言はせりふ劇という立場で、同じ舞台で演じられるので両者をあわせて能楽と称されています。

また、能の歴史の源流は、日本の古い芸能の一つに「猿楽」と言われるものがあって、こっけいなものまねが本芸であったようです。それが鎌倉時代のころ（十三世紀）からまじめな歌舞劇も演じられるようになり、以来それを能と称するようになったそうです。南北朝の頃には、各地の猿楽の座で能が演じられる一方、猿楽の本芸はせりふ劇として完成し、狂言となったと知らされております。

「能の始祖」は（十四世紀半ば）大和猿楽の一座の名手観阿弥とされ、その芸が将軍足利義満に認められ、さらにはその子世阿弥も特別に愛護されたことから能は優雅な舞台芸術へと高められ、何時しか庶民にも親しまれる能となったようです。しかしながら、徳川時代には幕府の儀式芸能となり、技術の鍛錬のみを心がけるようにと変遷していったようです。

その後、近世―現代能へと継承され明治―大正期には趣味として謡を稽古する人が観客の大部分だったそうです。現代では純粋な舞台芸術として再評価され、一般的には親しみのないものとされていましたが、高度の様式性と極端な不確定性の共存する点が魅力であったのか、それとも現代芸術と共通するものがあるのでしょうか、最近では他の音楽や演劇との交流も見られ、国際的にもこの能楽の特殊性が一大評価されていると聞きます。

ある雑誌によると、武蔵野大学などで日本の伝統芸能を教えながら、自らも喜多流仕舞教師をされているという、米国オハイオ州一九四九年生まれのリチャード・エマート氏が能に出会ったのは約三十年前とか。アメリカの大学のゼミで能を学び、その後一九七三年に再来日、本格的に喜多流の能を習いはじめられ、今では、私たち日本人以上に能楽にたいする理解と執念を示され、「能は不必要なものを徹底的に削ぎ落とすことによって、人間の奥深い内面を表現する前衛的な舞台芸術」と語っておられます。そこには、今昔之感の思いは否定できませんが、我々日本人には単に古臭いものとせず、世界的に評価された日本の誇る能楽としてみつめることが出来るのではないでしょうか。

青木の獅子舞

若西神社獅子舞保存会　加藤寿一

山崎町の中心部より菅野の谷を五㎞北進したところにある若西神社は遠く宝永二年二百七十年前に現在の社殿が建築されそれは棟札に明記してあります。祭神は建速須佐男尊、御右に事代主尊、御左に大国主尊が鎮座され古より崇敬されて参りました。獅子舞奉納については何時頃より始まったか定かでありませんが、江戸時代末期に出雲地方より伝えられたとの説があり当時より当屋制にて奉納されたと、古老のお話にあります。一時中止されておりまして昭和二十年頃より復活してきましたが、時代の急速な変化と後継者不足により奉納出来なくなりしばらく中止せざるを得ませんでした。けれど郷土の伝統芸能を守り末永く子孫に伝えようとの声が高まり昭和五十七年に若西神社獅子舞保存会が結成され、以後この保存会の手により毎年秋の大祭に奉納され今日に至っております。

若西神社の獅子舞は「道行」から獅子が神社に参拝までの儀式的な式三番「舞台入」「やしま」「つるぎ」に始まり、その舞い方に静と動をたくみにとり入れ観衆の興味を引く子役「双」「ぼたん持ち」「しばらく」を適当に配し「八島」「にしり」「ほら」を舞います。天狗やお多福により後半の見せ場を舞い、最後は技術的に非常にむずかしい獅子と子役の前猿又返しの技でしめくくっており、このように変化に富んだ舞が完全に継承されております。「舞わし手」「笛」「タイコ」指導者の皆さんが昼間の仕事の疲れもいとわず夜間の練習が一ヶ月以上続き大祭当日に奉納されます。大祭当日は地域の多数の参拝者の前で日頃の練習の成果を十分に発揮して拍手喝采を受けました。又学校で毎年行われている「ふれあいフェスティバル」等々への出演もしました。市内でのイベントなども依頼があれば参加をしております。約百六十年以上の歴史をもつ伝統芸能である若西神社の獅子舞を保存会の手によって立派に継承され秋の大祭にいつまでも奉納できます事を願っております。

数字の魔術とエムエイ

昭和会　赤松茂毅

「山崎断層が原因で大地震が発生したのは、つい最近の〇・〇〇一エムエイの頃です。」と言うと、何のことかお分かりにならない方も多いのではないかと思います。エムエイ（Ｍａ）とは、地質学等でよく使われる単位で「一〇〇万年前」を意味します。

なお、山崎断層では、約一〇〇〇年前に大地震が発生し、もう何時、次の地震が起きても不思議ではないと言われています。これをＭａ単位で現しますと〇・〇〇一Ｍａとなります。地球規模での山崎断層は約〇・〇〇一Ｍａ毎に大地震が発生し、次はいつ発生してもおかしくないと言われると、地球規模での山崎断層は常に動いていることになります。

私たちの生活基盤の生活道路南光（三河）～山崎～福崎へ通じるこの道路は、古代からこの断層によって侵食された自然の凹地を利用し、自然的に発達した生活道路なのです。そして、その上に中国縦貫道が作られ地質学の専門書にも紹介された数々の貴重な地形が消滅してしまい非常に残念な結果となってしまいました。

われわれは、阪神淡路大震災や新潟地震以後、地震について非常に神経質になっています。地震災害を軽減するための対策なり防災技術は大切なことですが、今一度視点を変えてみてはいかがでしょう。

私たちの目前にあるこの山崎断層は、左ずれ断層として世界的にも有名な断層です。日々せわしい時間の合間を見つけて時には、この複雑な世界的にも珍しい山崎断層を眺めたり、地球規模で見ると常に動いていることになる〇・〇〇一Ｍａに思いをはせる時、何だか断層や地震と共生できるような気にさえなるのは私だけでしょうか。

合唱団に入団して

山崎児童合唱団

城下小　六年
梅岡千翔

私は、二年生で合唱団に入団しました。入団した頃ドキドキ・ワクワクしていた一年間だったと思います。二年生から三年生になる時、私は、合唱団を中断していました。でも、「二年生の時に、きちんと一年間がんばれたんだから、もう一度チャレンジしてみよう」と、思いました。

六年生になり、私達が年下の子たちを引っぱって行くばんになって、上級生の大変さがわかりました。

合唱祭、文化祭などのイベントに参加してきたし、いろんな歌を歌ってきたのが思い出に残っています。

少しずつ、日々がながれて行くうちに、入団してからの、五年間が、ついさいきんの事のように思っています。今年は最後の定期演奏会です。がんばってやりとげたいです。

戸原小　六年
山下リサ

私は、山崎児童合唱団に入団して一年ごとに、学年が上がる度に、いろんなことが出来るようになりました。

一年生の時にお姉ちゃんと入団して、合宿に行きました。合宿では楽しく遊んだり、練習をやって、みんなでがんばりました。でも、トイレに行って出ようとするとカギがあかなくなってとじこめられてしまいました。でも、六年生が出られるようにしてくれました。その時、さみしくなって涙がたくさんでました。

その時の思い出は、先生も、私も、助けてくれた六年生も覚えている、今では笑い話です。行事のある時は、うまくなるまで練習をやっていたので、先生の言われそうなことは、だんだん分かってきました。

毎年定期演奏会をやってきました。その役は、先生がこの子には、この役があっているからときめてくださいました。その役は、私は好きな役ばかりだったのでうれしかったです。楽しくてうたも上手になっていたけれど、卒団になるのはさみしいです。けれど、たくさんのいい思い出ができました。残りの皆は、私の分も、一生懸命やってほしいです。

私と民踊

さつき民踊グループ
白谷由美子

私がさつき民踊グループに入らせて頂いて今月（十二月）で丁度二年になります。その間春の芸能祭、秋のふれあい文化祭そして老人会、敬老会、施設等訪問などボランティア活動をさせていただきました。まだまだ未熟ですが日本の民謡を体で表現できるすばらしさを感じつつあります。これも先生（坂東寿賀幸）のご指導のもと、西川会長さんはじめ、すばらしいグループの皆様のおかげと感謝しております。

異年齢遊びは子供の時だけでなく、大人の世界にも大切なことのように思います。同年配ではなく年齢の違う方とのふれあいは良い刺激になります。さつき民踊グループは異年齢の方々の集まりです。私にとって人生の先輩が多く踊りだけではなくいろいろと人生勉強をさせていただいております。

明るく元気で前向きにが私のモットーです。そのために民踊は必須科目のひとつになりました。これからも日本中の民謡を踊る事が出来たらどんなに素晴らしいだろうとおもっています。みなさん是非、一緒に日本の民謡をおどりませんか。

「高齢期」だと自信なくさず

山崎詩舞道連盟
田谷明治

我が国は今や超高齢化社会で総人口の四分の一を老人が占めております。そのため生産年齢人口は少なくなっております。又社会保障費は増大しております。このままでは日本も大変です。この辺で老人も発想を大きく変えるべきだと思います。今は七十歳を超えても若者に負けない気力と活力を持っている人が多くおられます。健康である限り自分の経験や特技等を生かして社会に役立つべきだと思います。

私も詩吟を趣味として活動してより四十年になります。吟剣詩舞道にはいろいろ長所がありますが私は特に次の三点を強調します。

第一の長所は先ず魂の栄養になると思います。私たちは毎日朝昼晩の食事をして体に栄養を取っております。「健全なる身体には健全なる精神がやどる」の諺通り人間にとって最も大切な魂となります。

第二の長所は心の安定剤です。つまりストレス解消になります。今や世の中複雑で情報化時代で競争も激しく精神的にもどんな人でもイライラします。そんな時に詩を吟じるとストレスが吹きとび気持ちがすっきりします。

第三の長所は、体の健康や美容に役立つと思います。吟詠の発声は主として腹式呼吸法によっているので新陳代謝も良くなり自然と血行も良くなります。

私は常に「吟ずれば我が健康の泉湧く」を信条とし健康に留意し明るく楽しく愉快に自信を持って将来に向かって邁進して元気で暮らしたいと願っております。

私は高齢化が進んで行く中で高齢者の良き友となりたい一心からゲートボールを始めてより十五年となります。今日ゲートボールは誰でも気軽に楽しめるスポーツとして親しまれ、愛好者は海外にも多く増えて大変喜ばしいことです。今後も誰でも出来るスポーツとして一人でも多く愛好者になっていただき仲間づくりを大切に心と心の触れ合いを大事に明るい太陽の下、元気で楽しくプレーする事が健康づくりにつながる事と信じます。

今後は益々地域の方々との交流を深めて残された人生を送りたいと努力しています。私が永い年月素晴らしい詩吟やゲートボールを続けて今日まで来られたのも家族の格別の理解と協力があってこそと常に頭の下る思いです。

「枯葉」によせて

山崎町民合唱
藤井七代

町民合唱、各パートを維持しながら長年活動を続けてくることができたのは、団員は勿論、関係皆々様のお陰と感謝しております。例年どおり文化の日、指揮、栗山祐子、伴奏長井美江両先生の下「秋のふれあい文化祭」に出場、「母の教え給いし歌」「枯葉」の二曲を合唱させて頂きました。

練習中より「枯葉」についての想出が甦りはじめました。フランスツアーに恵まれ最終パリの夜、シャンソン喫茶を訪ねる事になりました。行先はモンパルナスの丘に在る「オ・ラパン・アジル」でした。此地で生れ育った画家ユトリロ、ピカソ等の芸術家が足繁く通った由緒ある店という事でした。フランス語堪能な添乗員を先頭にメトロを乗り継ぎ地図を頼りに、やっと到着、扉を開くと受付は薄暗く定かではありません。押されてホールへ、幾分明るい照明、壁には店主の肖像画等々。ピアノから休みなく音が流れ、中央卓の男女数人が歌い手らしく、壁際の椅子には人人人。旅行者を含め色々なタイプの人が集まっているようでした。コスモポリタン風な気になる風体の人も見受けられ、私達もほの暗い席に詰込まれ客の一人となる事ができました。その中で、一同の目がキラキラ光っていると感じられました。演奏再開、ばら色の人生、オ・シャンゼリゼ、枯葉等々おなじみの曲が続々登場。ピアノ、歌い手、店主の美声がリードし歌い続けられます。その後、卓上手廻しオルガンでの歌謡ショー。いなせなギター歌手のソロ。早口のフランス語にはお手上げ。メロディに同調し歌を楽しむ中に予定時間が来てしまい、心を残しつつ退出することに。

はからずも、この夜の場に出遇い改めて「音楽は世界をつなぐ…」を実感致しました。やはり歴史の重みを持つシャンソンは素的でした。

この時間をいつもの歌の仲間の皆さんと一緒に共有できていたら、楽しさも、いや増していた事でしょう。雨に濡れた深夜のモンマルトルの丘を下り乍らそんなことを思っておりました。

楽しかった一年半

播州山崎太鼓　城下小六年　辻川輝匡

ぼくは、五年の六月から山崎文化会館の「太鼓教室子どもの部」に参加してから、太鼓のおもしろさをしりました。初めは、リズムがわからなくてこまったけど慣れてくると、いろいろなリズムで太鼓をたたけるようになり、それにつれてどんどん難しくなってきてそのリズムができると達成感が大きくなったので楽しかったです。

文化会館で「秋の芸能祭」では、多くの人の前で太鼓をたたくのできんちょうしました。でも太鼓をたたいていると、きんちょうもほぐれて、人目を気にせずにたたけました。

演奏がおわると先生から、おかしをもらいました。家に帰ってから食べました。家へ帰る時、車の中で今日うまくできた事とできなかった事をお母さんに言いました。その時々の言葉はちがったけど、いいアドバイスになって、いい参考になりました。ぼくは来年、中学校で部活が大変ですから太鼓ができなくなります。だからこそ、この一年半でいい経験ができました。先生ありがとうございました。

地域を代表する花

播磨さつき会
田口實

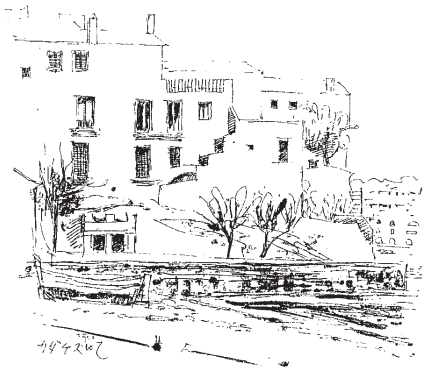
愛好者数人から立ち上げられた「サツキ会」が数年後には町花に制定されて、名称も「播磨さつき会」と改められ、最盛期には会員数も二百人を越え、町民誰もが愛する花として栽培・普及に努力されて来られた先人諸氏に対し感謝しているところであります。

時の流れと共にライフスタイルも大きく変化した現代社会にあっては、盆栽を愛培する余裕すらもない状況の中で、会員も高齢化するなど諸事情を克服しつつ今日に至っております。

バブル崩壊後、地域活性化に向ける一策として、地域の観光資源や特産物などの掘り起こしを図り、多くのイベント合戦が展開されて来たところであるが、なんと言っても、山崎町の「さつき祭り」は新市内においても集客数の大きなイベントであることは言を待たないところです。

それは、先人達が培って来られた山崎の気候、風土に即した栽培と繁殖方法などの研究の成果であり、永々と今日まで関西における「さつきの町」として名声を揚げるに至ったことは町民誰もが評価するところだと思います。

今年四月には四町合併による新市が発足したのに伴い市木市花の応募により十一月広報による審査結果の発表がなされ、市木に「ブナ」、市花には「ササユリ」と決定されましたが、これまた一つ趣味を広め、新市のシンボルとして市民誰もが愛する花として育てていきたいものだと思います。



平成会十七年のあゆみ

平成会
田内義隆

文化協会様また各団体の皆様にはいつも大変お世話になっています。この場をお借りしましてお礼申し上げます。宍粟市誕生の記念の年に当たり、平成会の日頃の活動を報告させて頂きます。

年齢順に毎年交代する会長の下、現在会員数二十九名で月一回の例会開催を原則として、十七年の間途切れることなく行事を続けています。講師例会、家族例会など回数が重なるにつれ新たな行事を計画するのも容易でないところもありますが、会員全員の協力の下に、各年度の役員（会長・副会長・会計・事務局・班長で構成される）の毎月の協議と、四つに分かれた班による年数回の班会議が基になり行事が企画・運営されています。

それぞれの班が、工夫をこらした企画を持ち寄り各班担当の例会が行われますが、恒例となって定着しているものとしては、平成会農園（六月に開催され、山崎町内の各幼稚園・保育所の子供達も収穫に招いています）があり、山崎八幡神社でのカウントダウン（十二月三十一日夜、除夜の鐘を前に多数参拝される方々に年越しそばを振る舞い、新しい年を迎える）があります。家族例会も楽しみの行事の一つですが、近年会員の子どもたちも大きくなり、子どもを交えた例会から、夫婦共にした家族例会へと変化をとげようとしています。長い年月の間に少しずつ形を変える部分もありますが、十七年間培ってきた行事を通して会員相互の親睦は益々深まり、家族を大切にした会としても成長しつつあります。そして、五年毎の区切りとして行う記念行事も平成会の持続する志の一端を皆様にお披露目する場として、大切な企画になっており、それは半年以上の時間をかけて準備されます。

これからも皆様のご指導を仰ぎながら少しでも地域の皆様のお役に立つ活動が出来ればとも考えています。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

日本民謡に出会って

山崎民謡連合会　佐野祐介

友人に誘われて、民謡を習い始める事になりました。

最初は、それこそなんの知識も無く、いろはのいから、でもみなと一緒にやることで人を知り、見聞を広める事ができればいいがなあの気持ちでした。先生は、中川昇先生で姫路から月二回、場所は上寺興国寺、十人ほどで習っています。かれこれ十五年になり、民謡のよさがやっと分かるようになりました。

民謡のルーツを手繰って見ると日本民謡は、日本各地で庶民のあいだに歌い継がれてきたもので、楽典に則りつくられたものではありません。拍子等、多くが不規則なものになっています。しかし、古くから、人々の心の中にあった日本民謡は、どこか私たちの心を強く打つものがあります。ゆっくりしたテンポの歌、さびしい曲調の民謡、素朴な曲、そして、陽気な民謡とさまざまです。また北海道・東北の厳しい気候の中で生まれた曲、そして、九州・沖縄の民謡など、曲の感じも異なっています。民謡の多くは、農村から生まれ、これらのほとんどが踊りを伴い、村人の慰安としての意味合いをもっています。

民謡には、「労働歌」「祝い歌」「踊り歌」「宗教歌」「子守唄」があります。「労働歌」は仕事の苦しさをまぎらすため、又仕事がはかどるように、仕事にあわせて歌う歌です。宍粟市を流れている揖保川に、揖保川筏流し唄がありますがそのなかに

①イヤー（ホイホイ）戸倉の丸材を飯見で組んでヨー（ホイホイ）筏流せる恵みの雨よ（アリャホーイホーイ）

②ともし火またたく龍野の城下ヨー（ホイホイ）揖保川下りの泊まりどこ（アリャホーイホイ）

船頭が波賀の飯見で丸材を筏にして恵みの雨をまって水が増えた時期を見計らって、龍野まで流し運んだ後今夜の楽しい泊りを思い浮かべている情景、歴史を感じます。こんなよい唄を後世に残し伝えたいものです。

会員の句を二句ずつ

川柳破丸会　清水省三

席取りに置いた雑誌が読まれてる
酒煙草問診表には半分を
小畑　欽酔

何につけ便利な言葉頑張って
さもいやな顔していそいそ忘年会
岸本　新風

まっぴらと言わず金比羅又おいで
猫舌が冷めた料理に文句言い
香山　釣遊

五線譜に書けない祖母の子守歌
捨てよかな去年の暮も思案した
志水　亀の子

約束をせぬに春には花が咲き
長寿でも金が無ければ邪魔になり
清水　三省

年賀状隙間に思い書き綴る
燃えた日もいつしか忘れ半世紀
田中　万来

スタミナを付けたいけれど糖尿病
勤労を感謝したいが失業中
谷口　柳幸

書道展さっぱり読めぬ字が並び
気が付けば釣った魚の尻の下
谷口　遊愉

捨てる服よくよく見ては又しまう
短い日長い日もある年の暮
谷川　そよ風

レトルトのチンした料理ママの味
長居する客に箒が見当らぬ
千本　花夢

お互いに若い奇麗とクラス会
二所帯にリフォームしたが子は別居
千本　風笊

ダイエット本を読みよみつまみ食い
車椅子押してた人がよたよたと
中津　水香

地味婚をしたが喧嘩は派手にする
父の日に外食するも父の金
板東　笑雅

どこだっけとっさに隠したへそ繰は
早熟を天才じゃと言う馬鹿親爺
平形　秀柳

宴席で取りの挨拶酒控え
長電話鍋はぐつぐつ椀は冷え
山本　山水

耳栓をした本人が大鼾
事故多発その看板に車当て
山田　酔仙

嗚呼 紅の血は燃えて

新潮会
岸本哲郎

花も蕾の若桜　五尺の命
ひっさげて国の大事に殉ずるは
我等学徒の面目ぞ
ああ　紅の血は燃ゆる

想い起こせば今から六十一年、半世紀余の昔の昭和十九年、学徒動員令により私達は学業を棄て、工場へと向かいました。大東亜戦争の戦局悪化と共に、それまでは春、夏、冬の休みに勤労奉仕に駆り出されていた私達五年生は昭和十九年七月から通年動員と云う事で、六月末に卒業試験が繰り上げ実施され、七月から大阪陸軍造兵廠勤務となりました。

当初の二ヶ月程は油庫に配属され、種々の油脂類をオート三輪で各処に配送すると云う比較的楽な勤務でした。

九月頃からは第一製造所第四工場第四旋に配置され工作機械を扱う事になりました。旋盤、ボール盤、スライス盤と種々の機械があり私は旋盤を扱う事になりました。第四旋の工作機械はアメリカ製のものが多く後に配置替えになった第七旋のベルト式旋盤に比し、極めて高性能の秀れたものでした。

勤務は甲乙二班に分かれ、一週間で昼夜勤の交代制で昼勤は朝七時から夕七時、夜勤は夜七時から朝七時の完全十二時間、休日は日曜のみ、週休二日制の現在の労働条件からは考えられない過酷なものでした。

昭和二十年一月頃、第七旋に配置替えとなり天井からベルトがおりている明治、大正時代製の旋盤となりました。ベルトがよく外れて長い物干竿の様な棒で掛けるのに苦労し、又腕カバーがベルトに巻き込まれそうになる等大変苦労した思い出があります。同じ工作機械でも舶来と国産の差が大きく、こんな事で戦争に勝てるのかなと疑問を抱きました。

何れにしても学生が本分である学業から離れる様な悲しい時代が再び来る事のない様、こんな経験は私達でもう充分、将来に亘って平和な時代が続くことを念願し、駄文のペンを擱きます。

今日このごろ

山崎美術協会
福岡久藏

今年はスペインへスケッチに行きました。飛行機を降りたのがバルセロナです。バルセロナは一九九二年に夏期オリンピックが開催されたところです。

早速、バスに乗って「聖・家族教会」を見学に行きました。この教会はバルセロナ生まれのアントニオ・ガウディが設計したものです。彼は建築と彫刻と絵画を融合したという繊細で奔放な天才建築家です。その代表的な傑作が「聖・家族教会」だといわれています。

私たちの常識をはるかに越えた、自然を模した、ネオ・ゴシック様式の教会。その建築に彼は全精力を注いだのはいうまでもありませんが、事故でなくなるまでの四十年余りで完成したのは、設計した三つの塔のうち「キリスト生誕」の塔一つだけです。彼にとっては自らの手で完成させたかったことと思います。

その後、内乱などがあって工事を中断したりしましたが、現在もなおキリスト教徒の献金などによって、細々と工事は続けられています。以前、私が行ったときは本当に細々でしたが、十年たった今年は工事も大々的で、大変な進みようでした。日本人技師も参加しているそうです。

完成すると高さ四十五メートル・奥行二百メートルにおよび、世界でも最大級の美しい教会ができるそうです。スペインではガウディを信じ、その芸術性を誇りにし、二百年かけても完成させるといいます。

一方、日本では、耐震強度偽造データーを作成した建築士がおり、偽造を見過ごす検査官がおり、安全よりコスト削減だけを考える施主がおり、設計がおかしいと気付かない施工者がおり、危険なマンションと知りつつ売り捌く販売人がいる。何とも恥ずかしく、情けない日本人。

しかし、日本にもかつては、「千年の木は、材にしても千年はもつ」「森を大事に、自然を大切にや」と言われた宮大工の西岡常一さんがおられました。西岡さんは自然の輪廻転生をいわれていたのでしょうか。

千田淳平氏の功績を想う

バンブーファイブ　松岡　潔

千田氏が山崎に住まれて十一年、数々の功績を残されて平成十七年の春、大阪へ帰って行かれました。

思えば平成六年に初めて千田氏に会って、尺八と洋楽器のバンド結成を勧められ、五名で出発したのでした。最初は合わすのが精一杯で無我夢中で練習しました。

アマチュアゆえの失敗を重ね、最近では千田氏も含めると八名にもなり年に数回の出演の他、毎年随陽寺での自分達のコンサートが出来るまでになりました。毎回百名近くも聴きに来て頂けるのは、本当にありがたい事です。

私には、楽器演奏と言う生涯付き合っていける何物にも替え難い素晴しい趣味を与えて頂きました。あの日、千田氏に会わなければ今頃は音楽とは関係の無い人生を送っていたかも知れません。

又、私だけでなく他にも幾つかの音楽バンド結成の力になられ、私と同じ様に音楽と言う素晴らしい趣味を持つ事が出来た人が沢山居られます。そして、その皆さんと交流を持つ事により、沢山の友達も出来ました。

バンブーファイブと言う一つの音楽バンドから始まって、今では多くのサークルが出来ました。「音楽の好きな人なら誰でもいらっしゃい」と言う大変優しい人、その千田氏が去られた今、バンブーファイブでは私がピアノを少しづつ弾いていますが、独学で完成された千田氏のピアノテクニックには到底及ばず、身に沁みて千田氏の偉大さを感じております。

千田氏の恩に報いる為にも、これからも皆で益々練習に励み、楽しく和気あいあいと音楽ライフを送りたいと思って居ります。千田さん、ありがとう。

六十の手習いで思うこと

山崎邦楽邦舞研究会
琴泉菖蒲会
寺元　美智子

いつぞや山崎文化会館で観月会があった時友達とお抹茶をいただき、そこで着物姿の優雅なお茶席と、琴を弾いておられる人たちの姿を見て、お琴もいいな！と感動しました。遠い昔（娘時代）に少し琴を習ったことがありましたが、私には時間と心のゆとりが無く途中で止めてしまいました。六十の手習いで、琴を習ってみようかとお友達と二人で相談しました。「琴は笑い笑い始めて泣き泣き止める」と聞いていました。しかし今更この年で…と言っていられない、今が一番若いと開き直り決心したのです。先生の御指導を受けお稽古を重ね披露出来る場は春と秋の芸能祭です。交流の場を広げ芸を磨くのだ、と教わり緊張して出演させて貰っています。又あるときは老人ホーム白寿園のお花見会に慰問公演として出かけ、屋外のステージで賑やかに紅白の幕を巡らせ観客席のお喋りがよく聴きとれる程身近な会場だったので、演奏する曲の童謡など音楽に合わせて口ずさんでおられるのが私達に伝わり嬉しく胸のつまる思いが致しました。顔なじみの方が入所されているので、又来てねとか上手だったよとか言って下されば、これでも少しは他人様の役に立ったのかと思い、やっぱり習っていてよかったとつくづく思いました。何でも好奇心を持ち趣味に熱中出来る時間を自分で工夫しています。そして地域で、たくさんのお友達と接し求め合い協力して文化を育てこの道で汗を流し穏やかな日々を元気に過ごせたら幸せと思います。

緑豊かなこの宍粟市をみんなで良き町良きふる郷にしたいと願います。

宍粟市山崎文化協会
役員及び団体名

会　長　藤井　慧乗
副会長　長川　耕一
　　藤村　清一
　　伊野　操治
　　福岡　久藏
理　事　春名　俊夫　山崎郷土研究会
　　久宗　丑雄　山崎植物同好会
　　町　　悦子　山崎文学会
　　浅田　耕三　新潮会
　　栗山　節子　山崎歌人協会
　　竹添　和彦　山崎囲碁同好会
　　谷川　ヒデ　山崎茶華道協会
　　伊野　操治　山崎謡曲同好会
　　志水　正信　山崎町郷土芸能保存会
　　山國　喜丈　昭和会
　　田中　早苗　山崎児童合唱団
　　芦田　八重　山崎俳句協会
　　西川　慶子　さつき民踊グループ
　　福岡　久藏　山崎美術協会
　　大部　正勝　バンブーファイブ
　　石野　和雄　山崎邦楽邦舞研究会
　　田谷　明治　山崎詩舞道連盟
　　片山　澄之　山崎町合唱連盟
　　久保　　洋　播州山崎太鼓
　　田口　　實　播磨さつき会
　　田内　義隆　平成会
　　石田　陽子　山崎民謡連合会
　　清水　省三　川柳破丸会
監　事　庄　　清
事務局長　前野　良造
同次長　井口　武一
会　計　西川　佳代
教育委員会　亀井　義彦
同　　西山　健一

（敬称略・順不同）

「やまさき文化」編集委員

編集長　浅田　耕三
委　員　荒木　俊介
　　芦田　八重
　　井口　武一
　　栗山　節子
　　長川　耕一
　　北川　泰子
　　藤村　清一
　　町　　悦子
　　前野　良造
　　西山　健一

事務局だより

昨年、宍粟市発足に伴い当文化協会も「山崎町文化協会」から「宍粟市山崎文化協会」への改名、「宍粟市文化協会」の設立とその下部組織として位置づけ、と組織上は大きく変化しました。組織の拡大による各団体の交流や情報交換による活動の振興・発展を目指す一方、加盟団体には地域に根ざした比較的小グループの活動も多いことから地域に密着した地道な活動も大切にしていかなければなりません。当面は、従来の各町単位の文化協会活動をそのまま継続しながら、広域な行政単位に対応した効率的な市文化協会のあり方を検討し構築を目指していくことになります。そのためには現在、各地域文化協会ごとにまちまちな規約や予算執行のあり方、イベントなど調整すべきことも多くあります。とくに活動事業費については、その規模の大きさからも当文化協会のあり方は注目を集めることになり、より効果的で透明性の高い執行を計らねばなりません。そのためには予算策定段階から各加盟団体にも活動計画などこれまで以上に情報提供面でご協力を戴き、文化協会として自主性をもった活動と加盟団体補助を計画していく必要があります。各加盟団体のご協力をよろしくお願いいたします。

事務局長　**前野良造**

編集後記

編集長　**浅田耕三**

今号もみなさんの多様活発な活動状況をお寄せいただき、係として大そう嬉しく感謝いたします。

今号は山崎町出身者のご寄稿を茨城大学教授で精神医学、心理学者の尾崎久記先生にお願いしたところ、快く承諾して下さいました。

現代の子供を取り巻く高度情報化社会をはじめとするさまざまな教育環境、生活環境のめまぐるしい変化の中で、子供たちがどう成長し、それに大人たちがどうかかわっていくべきかという、最も重要な今日的課題について貴重なご教示を頂きました。

プロフィールにあるように、先生は山崎町高下のご出身の、長らく本誌の題字を書いて下さった尾崎正一先生のご子息で、当「やまさき文化」とはご縁の深いお方です。

表紙絵並びに挿絵は先号にひき続き福岡久藏さんの詩情豊かな水彩の風景画で本誌にひときわいろどりを添えて頂きました。

また冒頭の町悦子さんの作品は、山崎藩にもゆかりがあり、日本の企業経営の理念の基となった石門心学について書かれたものです。

その他取材、執筆にいろいろとお力添え頂いたり広告にご協力下さった方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業からのお願い

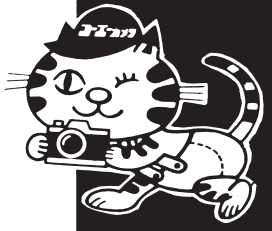
人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で40数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、一人の人間として使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

✦最新型カラー現像機導入✦

カラープリント・スピード仕上げ

良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop

コーエーカメラ

宍粟市山崎町東鹿沢26-3 本　店 TEL(0790)62-2089

咲ランド店 TEL(0790)63-0533

料理旅館・割烹

創　業

文久元年　菊　水

兵庫県宍粟市山崎町山崎 287

TEL（0790）62－1119㈹

寿　幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181　TEL(0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション

自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電装株式会社

本社・工場　兵庫県宍粟市山崎町今宿 98－15

TEL（0790）62－1607㈹

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

用途に合わせて
にししん個人ローン
●住宅ローン　●フリーローン
●マイカーローン　●カードローン
●学資ローン

・豊かな老後生活のために
・資産の効率運用に
にししん個人年金保険
●定額年金保険
●変額年金保険

豊かな街づくりをお手伝いする
西兵庫信用金庫

http://www.shinkin.co.jp/nisisin/

一献献上　品質本位
まごころを伝えます。
播州一献
確かな品質と味わい。
TEL. 0790(62)1010
FAX. 0790(62)6218
SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28

環境と家計にやさしい給湯器!
CO2削減　光熱費カット

省エネ基準112%達成
省エネ大賞受賞・高効率ガス給湯器
ecoジョーズ

お車と住まいの快適、なんなりと
ホンジョウ
(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)
本社 宍粟市山崎町中井96
●石油・タイヤ・自動車用品　●ガス・水道・住設リフォーム
☎0790-62-4321　☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御菓子司
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
本　店：播州山崎町さつき通り（電）0790－62－0170
山田店：播州山崎町山田（電）0790－62－0160
福崎店：福崎町西田原1177（電）0790－22－7555

パソコン・ＯＡ機器・事務用品・スチール家具
各種修理・学校設備品・理化学機器
office service イトーオフィスサービス株式会社
山崎町中広瀬117－12　夢公園南隣　ＴＥＬ(0790) 62－0126